金の卵１９６０

～あすなろぅ～

作　三浦　実夫

◆登場人物◆

山川　民夫　パン職人
倉科　欽次　集配責任者
北島　真一　社長の息子
藤谷　風子　店員
水谷　冴子　看護学生・経理主任
倉科　朱実　欽次の妹・バーホステス
白鳥　謙介　真一の叔父・工場長
田所　虎吉　刑事
井上　政吉　ヤクザ者

◆舞台設定◆

都電が走る新宿通りと靖国通りに挟まれた、ドヤ街の一角にあるパン工場の集配所。
上手に事務室へのドアがあり、その横に事務室と集配所に通じるカウンター付きの小窓があり、黒電話とポータブルラジオが置かれてある。
舞台中央には数脚の丸椅子に囲まれた木製の作業台。その正面奥に工場への通路があり、横に番重が積まれた奥から、パンの生地を練るミキサー音が絶え間なく聞こえている。

下手には外に通じる玄関ドア。その脇の板壁にヘルメットとバールがぶら下がっている。

ー一場ー　１９５７年春　午後

「風月パン」の集配所。
外からオート三輪のエンジン音。
壁に『山川民夫君・藤谷風子さんの入社お目出度う』と書かれた横断幕が掲げてある。
冴子と朱実が伝票を手に番重（木箱）にパン詰め作業をする傍らで、セーラー服姿の風子が伝票を読み上げ、学ラン姿の民夫が慣れない手つきで、番重にパンを詰めている。

風子　クリームパン。二〇個…。
民夫　クリームパンどれすか？
朱実　そこのグローブの形したパンよ！
民夫　グローブ、グローブ…あ、これだ…。（と、番重に詰める）
風子　（冴子に）あのう。これ何て読むですか？
冴子　（伝票を覗き）鶯。ウグイスよ！
風子　えっ。ウグイスって？　（と、視線を空に泳がす）
朱美　（苛ついて）パンよパン。ウグイスパン！
風子　（民夫に）ウグイスパン。三〇個…。
民夫　ウグイスって？
倉科　（玄関から現れて）冴子さん。真一のヤツは？
冴子　買い物に行ったきりよ。
倉科　まったくアイツは忙しい時に限ってだからなー。

と、積んであるパンの詰った番重を担う。

倉科　ああ、邪魔だ。退け！　（と、民夫を突き飛ばす）
民夫　（ヨロけて）あ、どうもす。
倉科　この糞忙しい時に、モタモタすんじゃねぇよ！
民夫　ああ、すんません…。
倉科　ドライバーがカリカリしてるから急いで！（と、玄関へ去る）
冴子　はーい。（風子に）こっちはどう？
風子　ジャムパンが一〇個ですー。
冴子　（素早くジャムパンを詰めて）朱実ちゃんの方はどう？
朱実　はい、ＯＫで～す。
倉科の声　（外から）おーい。まだかあ？
冴子　はーい。ただいまー。

と、冴子と朱実が番重を担って玄関へ走り去る。
外から「よいしょ、よいしょ」と車に荷を積む声。

民夫　何だがえらぐ忙すねどごだなや。
風子　うん…。（と、バッグを抱えて窓を見ている）
民夫　んでも、パンのええ臭いだよ…。

民夫が興味深げに室内を歩き回る。
ブルブルブルーン。ドッドドーッ！
と、エンジン音がしてオート三輪が遠ざかって行く。

風子　（窓を指し）民夫。あれは何んだべ？
民夫　えらぐ高げ石塀だなや…。
風子　それにあの鉄条網…。ビガビガ光ってまだ新らすよ。まさがタコ部屋でねべな？
民夫　馬鹿。東京のど真ん中だぞ…。
風子　だども、鉱山で朝鮮人が住んでだタコ部屋に似てるよ。
民夫　そう言えば…何だがおっかねなあ…。
倉科　いやあ。終わった終わったー。
朱実　今日も、何とか間に合ったねー。

と、外から倉科と朱実と冴子が来る。

冴子　来たばかりなのに、手伝わせてごめんね。
倉科　ふん。邪魔してただけじゃねぇか。
朱美　兄ちゃん！　（と、倉科の腕にパンチ）
民夫　（窓の外を指し）あれは何すか？
冴子　（眺めて）鉄条網がどうかしたの？
民夫　こいつがタコ部屋でねーがって…。
風子　民夫！（と、民夫の足を踏む）
民夫　あ、痛でな！
倉科　成る程。あの高い石塀と鉄条網見りゃあ。誰だってタコ部屋と分かるよなあ。
民夫　えっ。まさがー。
倉科　そのまさかなんだよ。さあどうする！
民夫　（怯えて）えーっ。
倉科　可哀想にみんな騙されてよ。二度と外に出られないよ。

と、玄関のドアを締めて逃げ道を塞ぐ。

風子　（泣きべそで）た、民夫ーっ！
民夫　（風子を庇い）風子、帰るべ！
風子　う、うん！
民夫　ええが行くぞ。そごを退ぐだーっ！

と、民夫が背中を丸めて倉科に突進。
倉科に躱されドアに当たり床に転がる。

民夫　う、うぅーっ。
倉科　ははは、諦めるんだな。逃げられりゃしねぇよ！
冴子　倉科君、二人は東京来たばかりよ。脅かしちゃだめよ！
朱実　全く、兄ちゃんは…。
倉科　あはははは。悪い悪い、冗談だよ冗談…。
民夫　うっうぅーっ。（声を殺して泣く）
倉科、泣くなよ。田舎者は根性ねーな。
朱美　兄ちゃんが脅かすからだろ！
倉科　しかし、バッチリ訛ってるね。出身どこ？
風子　はあ。宮城県の花山村つーどごです。
倉科　へぇー。宮城のフラワーランド？
朱実　兄ちゃん。タコ部屋ってどんなとこ？

倉科　煩せーな。蛸がウジャウジャ居る部屋だよ。
冴子　また、倉科君はいい加減なこと言って。タコ部屋というのはね。炭鉱や大きな工事現場等で、労働者を一箇所に隔離して、奴隷のように働かせる所を言うのよ。
風子　おらの村にタコ部屋あったです…。
朱実　えーっ。本当に？
風子　はい。村外れの鉱山に朝鮮人が収容されでだです。
朱実　えーっ。タコ部屋はおっかないんだー。
倉科　此処だって似たようなもんさ。
冴子　二人ともごめんね。彼は嫌みの達人だから。
倉科　冴子さん。その言い方は嫌だなー。
真一　お待たせしましたー。江戸前寿司の参上だよ！

と、玄関から寿司桶を抱えた真一が現れる。

倉科　ケッ。何がお待たせだよ。今ごろきやがって！
冴子　また映画観てたんじゃないでしょうね？
真一　あったりー。いやあ映画って素晴らしいなあ。『風と共に去りぬ』のクラーク・ゲーブルとビビアンリー。
倉科　馬鹿野郎。何が『風と共に去りぬ』だ。こっちは配送のドライバー連中にせっつかれて散々だったんだぞ！
真一　だってよー。アメリカは世界戦争の真っ最中に、あんな映画を作っていたんだぜ。日本が勝てるわけないよな？
冴子　そんな屁理屈で誤魔化されないわよ。
真一　何を仰るんですか。映画は立派な総合芸術ですよ。
冴子　何が総合芸術よ。真一さんは不良なだけよ！
真一　はーい。それについては反省でーす。で、集団就職列車で来た新入社員て君たちかい？
民夫・風子　あ、はーえ。
冴子　山川民夫君と藤谷風子さんよ。
真一　僕は北島真一だ。宜しくねーっ！
倉科　俺はパンの集配をやってる倉科欽次…。
朱実　あたしは妹の朱実でーす。
民夫　はあ。よろすぐお願えします。
倉科　二人は定時制高校に行くのかい？
風子　えやー。なすてですか？
倉科　だって学ランとセーラー服でよ。
冴子　そう言えばみんな同じ服装だったわね…。
風子　大人がモンペじゃ拙かっぺって…。
倉科　それで学ランとセーラー服か。社会人の門出だと言うのに、田舎者の考えることは、サッパリ分からねな。（と、民夫に）君の学ラン年期入ってるけど、流行を追わない性質かい？
民夫　えやあ。家が貧乏なもんで…。
倉科　（と民夫の肩を叩き）貧乏かあ。好感もっちゃうなあ。
民夫　ははは、どうもっす…。
冴子　真一さん。歓迎会の準備を手伝って…。
真一　えーっ。何んで俺なの？
冴子　配送をさぼった罰よ！
真一　じゃあ。寿司の駄賃もらいますよ。
冴子　（通路へ向いながら）前払いしたでしょう。

真一　えーっ。あのチリ銭の三百円？
冴子　どうせ風と共に去ったんでしょう…。
倉科　おっ。冴子さんにしては上出来の洒落。
真一　あーあ。働けど働けどなお我が生活楽にならざり。
倉科　お前が言うか。お前がよーっ！（と、真一を蹴飛ばす）
真一　あーっ。痛ぇーっ。（と、通路へ去る）
民夫　今の人はパン職人ですか？
倉科　ああ、真一か。社長のドラ息子だよ。
民夫　えっ。社長さんの息子さん？
朱実　兄ちゃんと同い歳で、エリート校に行ってるんだ。
倉科　何がエリートだよ。俺たち就職組の点数を、先公たちが進学組の連中に、下駄履かせたからだよ。
朱実　でも真一さんは優しいんだ。焼きたてのパンをくれてさ…。
倉科　他の連中と違って、彼奴は差別しねぇからな。
民夫　東京にも進学組と就職組あるんすね？
倉科　その就職組も玉石混合でよ。出来がいい連中はホンダとか、日産の一流企業に就職してよ。俺たち落ちこぼれ組は環境の悪い、町工場で働いてるってわけよ…。ま、同じ就職組同士だ仲良くやろうや！　（と、民夫と握手する）
民夫　はー。よろすぐお願えすます…。
風子　朱実さんは、何時がらここで働いでるの？
朱実　あたしは集配の時だけのアルバイトよ。
風子　はあ。アルバイトですか？
倉科　本職は駅前バーのホステスだよ。
風子　バーって。お酒飲ませるどごでねの？
倉科　時給がいいからな。歳を誤摩化してやってんだよ。
風子　朱実さん。歳えぐづですか？
朱実　満で十六歳よー。
風子　えーっ。おらど同ず歳でねの？
朱美　へへっ。店では二十歳で通してんのよ。
民夫　えらぐ大人に見えるちゃあ…。
倉科　俺と朱実は、学校には碌に行ってないんだ…。
民夫　はあ。なすてですか？
倉科　（外を指差し）あの石塀を見ただろう。
民夫　はあ。真っ黒に焦げでるすね？
朱実　東京大空襲で焼けた名残りさ。
倉科　この界隈は黒焦げの焼け野原なってよ。残ったのは伊勢丹と三越のデパート位でよ。都電通りから富士山が見えるよ。
風子　えっ。富士山見えるすか？
倉科　毎日焼け跡の鉄屑を拾って、何とか飯にありついてよ。
民夫　東京も貧乏人がえるんすね…。
倉科　都電通りの高台には、早々と家や店が建ったが、この谷間の湿地帯は何時の間にか、行き場を失った食いつめ者の、バラックが建ち並んでさ。ごらんの通りのドヤ街ってわけよ…。
民夫　あのー。ドヤ街って何すか？
朱実　えーっ。ドヤを知らないの？
倉科　ドヤは「宿」の逆さ言葉さ。都電通りから下ってくる坂道に、こ汚ねぇ簡易旅館が並んでいたろ？
民夫　はあ、崖の穴に人が住んでいたです。
風子　目なぐ光らせでおっかねがった…。

倉科　あれは防空壕に住み着いた朝鮮人一家だ。そのうち「くずや～、おはら～い」って屑集めにくるよ。
朱実　同い年の友達がいるんだよー。
民夫　（風子に）村の鉱山にも朝鮮人がいだな？
風子　んだ。何処でも朝鮮人はモゾさげなや…。
倉科　他にも色んなのがいるよ。テキ屋の一家にヤクザの親分。チンピラの溜り場もある。泥棒やかっ払いは日常茶飯事だ。絡まれでもしたら面倒だ。夜の一人歩きはしないことだな。
民夫　す。すねーです！
朱実　この工場にも泥棒が現れるんだよー。
民夫　えっ。泥棒がくるんすか？
朱美　パンに使う砂糖やバターは、高く売れるからね…。
風子　それで。あの鉄条網なんすか？
倉科　ああ、滅多に現れねーから心配ねーよ。
真一の声　おーい、二人とも手伝ってくれよー。
真一・風子　あ、はえー。（と、立ち上がる）
朱実　あたしと兄ちゃんよ。ほら兄ちゃん行くよ！
倉科　あーあ、面倒くせえなあ。
朱実　兄ちゃん。特上寿司のご馳走が待ってるよ！
倉科　おーと。そうだったそうだった。（と、手を叩き）お寿司おっ寿司、おっ寿司ーっと！

と、朱実と倉科が調子を合わせて通路へ去る。

風子　民夫。タコ部屋より酷いでねーが？
民夫　何だがドえれどごさ来ちまったようだなー。

通路から半長靴の音を鳴らして白鳥が現れる。
民夫と風子に目もくれず椅子で新聞を広げる。

風子　（民夫を突っつき）誰だべ？
民夫　えれえ貫禄だ。社長さんでねが…。
朱実　はーい。お待たせしましたあ。
冴子　あら、工場長。いらしてたんですか？

と、料理を持った朱美と冴子。飲み物と食器を抱えた真と倉科が現れる。

白鳥　（新聞から目を離さず）うむ、今きたところだ…。
風子　民夫。工場長さんだって…。
民夫　早ぐお土産を出せよ。お土産…。
風子　あ、そうだったね…。

と、風子がバッグから吊るし柿を出す。

冴子　工場長。就職列車で来た新入社員の二人です。
白鳥　うむ。遠い所をご苦労だったねぇ。
風子　（進み出て）あのう。田舎のお土産ですー。
白鳥　ほう。吊るし柿とは珍しいな。（と、千切る）

民夫　おら村の特産です…。
白鳥　うーむ、懐かしい良い味だ。みんなも食べてみろ…。
冴子　はーい。いい良い香りー。
倉科　おっ。案外いい味してるな。
朱実　母ちゃんに貰って行こーっと。（と、何個かポッケに入れる）
白鳥　冴子くん。始めてもらおうか？
冴子　はーい。みんな席について！
倉科　お前らは今日の主賓だ。正面に座れ正面によ…。

と、民夫と風子を正面に座らせる。

冴子　ええ、それでは東北の中学を卒業と同時に、集団就職列車できた新入社員の山川民夫君と、藤谷風子さんの歓迎会を始めます。工場長、歓迎の挨拶をお願いします。
白鳥　あー。遠い所をご苦労さんだねぇ。パンは好きなだけ食べていいが、歯はよく磨くいて寝るように。（と、椅子に座る）
冴子　あのう。終りですか？
白鳥　ああ、以上だ。料理を前に長話でもなかろう。
冴子　（呆れて）では乾杯を…。
白鳥　君が進めてくれ。
冴子　それでは、山川民夫君と藤谷風子さんの、入社を祝って乾杯しましょう。カンパーイ！
全員　カンパーイ！
朱実　へへっ、お寿司からいただきまーす。
倉科　ん。やっぱり特上寿司は旨めぇな！
真一　欽次、急がなくての寿司は逃げねーぞ。
倉科　それは、こっちのセリフだ…。

と、倉科と朱実、真一が寿司を争って食べる。
白鳥、冴子が注いだ酒を旨そうに啜る。
珍しそうに寿司を眺める民夫と風子。

真一　二人は何でパン工場を選んだんだい？
民夫　はあ。給食で食ったジャムパンに感動すますて…。
倉科　ふーん。そんでもって腹一杯食いてぇなと。
民夫　それもありますが、挿絵画家なるのが目的です。
真一　えーっ。挿絵画家志望が何でパン工場なんだ？
民夫　東京出て来ねば何も始まらねーもんで…。
真一　パン工場は仮の姿というわけか？
民夫　えや。挿絵は通信教育でと考えてます。
倉科　要はパン工場なら、食いっぱぐれねぇって魂胆だろう？
民夫　はあ、正直その気持ちもあります。
倉科　食いっぱぐれはねぇが、絵を描いてる暇なんかねぇぞ。
民夫　（きっぱり）それは覚悟の上です！
冴子　何か描いた絵はないの？
風子　はい。ありまーす！
民夫　あっ、風子。やめろちゃあ！

と、止める間もなく民夫のカバンから、スケッチ帳を取り出し冴子と倉科と真一に配る。

倉科　おっ。小松崎茂の『大平原児』だよ…。
真一　こっちは山川惣治の『少年ケニヤ』だ…。
冴子　奇麗ねぇ。福島鉄次の『砂漠の魔王』…。
朱美　ふーん。やるじゃん！
民夫　えやあ。単なる模写ですからー。
倉科　（スケッチ帳を見せ）工場長。戦艦武蔵ですよ！
白鳥　うむ。（と、絵に敬礼する）
真一　（風子に）君も何か夢があるんだろう？
冴子　風子さんの夢はね、服飾デザイナーよ。
倉科　えーっ。二人ともパン工場と関係ないじゃん？
冴子　風子さんは仕事終わったら、都電通りのブティック店で、お針子さんの勉強するのよ。
真一　挿絵画家と服飾デザイナーかー。十五歳なのにしっかり人生の、目標を持ってなんて感心だなー。
冴子　それと結婚の約束もしているのよ。
真一　えーっ。二人は許婚ってこと？
民夫　えやえや、それはねーです。風子の服飾デザイナー志望を、親が許すてくれながったんで、結婚の約束は風子が東京にくる口実ですよ。なあ。風子？
風子　そうすねば東京にこれながったで…。
朱実　あたしの夢はラインダンサーよ。

と、朱美がラインダンスを踊る。

真一　えっ、朱美ちゃんがラインダンサー？
朱実　浅草国際の『菅原都々子ショー』でＳＫＤの、ラインダンスを観て一発で憧れちゃったー。
倉科　馬鹿野郎。その短足で何がラインダンスだよ。場末のストリップ小屋で、股を広げてのが関の山だよ。
朱美　いいじゃん。あたしの夢なんだから！
倉科　貧乏人の夢は儚くに消えちまうんだよ！
真一　全く。欽次の捻くれ根性が出たよ…。
倉科　世の中お前みてぇに恵まれた、人間ばかりじゃねぇからな。
冴子　ヤメなさいよ。寄ると触るとなんだからー。
朱美　ねえ。お寿司食べないの？
民夫　はあ。村は山国なもんで…。
朱実　えっ。お寿司食べたこと無いの？
倉科　成る程。新鮮な生魚はねぇか。
風子　はい。干物と塩漬けすか食ったごどねです。
冴子　美味しいわよ。食べてみなさい。
風子　（寿司を睨み）だども、何だがオッカネなやー。
冴子　今日から東京の人でしょ。食わず嫌いはダメよ！
風子　はいー。では遠慮ねぐ頂きます！

風子、トロ一巻を丸ごと頬ばる。
全員が注視するなか食べてお茶を飲む。

倉科　どうだ。美味いだろう？
風子　（顔を綻ばせ）民夫えらぐうめー。食べでみれ！
民夫　（寿司を睨み）本当がや？

倉科　睨んでねぇで早く食べなよ。
民夫　ううっ。やっぱす生魚は駄目だー。
朱実　ねぇ。あたし貰っていい？
民夫　あ、どんぞどんぞ…。
朱実　へへっ。やったあ！
倉科　じゃあ。玉子なら食えるだろう？
民夫　この黄色いの玉子なんすか？
倉科　これをタップリ乗せるのが、江戸っ子の食い方だ…。

と、タップリと玉子にワサビをのせる。

民夫　綺麗なズンダの色すてるすね…。
倉科　ああ、色もいいが最高に旨いぞ…。
民夫　はあ。では頂きまーす。（と、頬ばる）
冴子　ちょっとー。倉科くん！
真一　お、おい…。
倉科　どうだ。旨いだろう？
民夫　うう、うめぇー。うっ、うううーっ！

と、民夫が目を剥き涙と鼻汁の顔に変わる。

倉科　ははは、男なら飲み込むんだ！
冴子　真一さん。バケツバケツ！
真一　全くお前は意地が悪いな…。
民夫　ブハ、ブハッ。ハー、ハックショーーーン！

と、我慢仕切れず大きなクシャミする。
口と鼻から玉子焼き吹き出しぶっ散らかる。

朱美　うわーっ。バッチーイ！

民夫、悶絶してのたうって苦しむ。
白鳥、民夫の鼻を摘み口にパンを突っ込む。

白鳥　口直しに。これを食え！
民夫　ううう一。（と、貪り食い）こ、このパンは何つうパンすか？
朱実　ウグイスよ。ウグイスパン！
民夫　こんな美味ぇ物食ったのは、生まれで始めてだー。

と、涙と鼻汁塗れの顔で破顔する。

風子　埒もねぇ。おしょすごとーっ！
倉科　ははは、お前たちを大歓迎だよーっ。
全員　あはははは一。

と、拍手と爆笑で歓迎の声が弾ける。

―二場―　１９６０年　早春

外から、『安保ごっこ』で遊ぶ子供たちの声が聞こえる。
ラジオから『東京ブルース』の曲が流れる。
民夫が積んだ番重に隠れてパンを食べている。
通路から番重を持った風子が現れ、両胸にアンパンをあてがい、曲に合わせて軽快に踊り歩く。
民夫と風子、鉢合わせして互いに驚く。

風子　あ、どですた。そごで何すてんの？
民夫　ううっ！（パンを詰らせ胸を叩く）
風子　また盗み食いすて、冴子さんに叱られるよ。
民夫　今日は、これが二個目…。
風子　だったら、何で隠れて食ってんの？
民夫　別に隠れてなんかいねーよ。
風子　あっ、わがったー。

風子、民夫からパンを引っ手繰る。

民夫　あーっ、何すんだ。返せよ！
風子　やっぱり。焼きたてのウグイスパン！
民夫　だって毎日売れ残りアンパンじゃ、餡子の臭いが鼻について、食い飽きちゃったよ。
風子　焼きたてのウグイスパンは、人気商品で品不足なの。食べるなら売れ残りを食べてよ。（と、千切って食べる）
民夫　（奪い返して）やだよ。売れ残りのカピカピパン。食べるなら焼きたてが一番！
風子　夜勤明けなんだろ。寝なくていいの？
民夫　これから「あすなろう」の打ち合わせなんだ。
風子　それじゃ、寝る暇ないじゃない？
民夫　だから、チョコっと仮眠…。（**と、麻袋に包まる**）
風子　そんなとこで寝たら身体壊すよ。
民夫　へへっ、田舎の藁布団を思い出すなあ。
風子　民夫、「あすなろう」に深入りするの良くないよ。
民夫　えーっ。何でだよ？
風子　東京に遊びに来たんじゃないだろ？
民夫　風子。「あすなろう」は遊びじゃないよ。
風子　ロシア民謡歌って男と女が手を繋いで、フォークダンス踊って。遊びじゃなくて何なのよ？
民夫　何だ、風子。焼き餅かー？
風子　それに左翼学生とかいるんだろう？
民夫　ああ、民青や労働組合の青年たち、歌声運動の活動家とか色んな仲間が大勢いるよ。
風子　集会とかデモに誘われたらどうするの？
民夫　「あすなろう」は政治活動とは関係ないよ。俺たちのように地方から集団就職できて、町工場や商店で働く青年が中心のサークルだ。心配なら風子も参加してみろよ。
風子　私はファッションの勉強でいっぱいよ。それと村を出てくる

とき「赤と宗教団体」は駄目って親との約束だよ…。
民夫　（起き上がり）風子、その赤なんだけどさ。民青とか労働組合の仲間たちの話聞いてると、赤が悪いと思えないんだな。
風子　もう。洗脳されてるよーっ！
民夫　俺は挿絵の勉強が一番だ。赤や宗教に染まりやしないよ。
風子　そんなこと言って、挿絵の勉強は全然じゃない？
民夫　それが、「あすなろう」には色んなタイプがいてさ。モデルに事欠かないから、スケッチの腕はバッチリなんだよ。
風子　へえー。案外やることやってるんだ？
民夫　何処に居たって心がけ次第だよ。
風子　田舎から手紙きてない？
民夫　来たよ。結婚がどうとかって…。
風子　それで返事を書いたの？
民夫　書いてないよ。風子は書いたのか？
風子　民夫が何て書いたかと思ってね。
民夫　今の俺らに結婚なんて考えられるか？　パン職人だって半人前で、挿絵は五里霧中状態でよ。風子のファションだってそうだろ？
風子　でも、結婚の約束で来たから…。
民夫　風子。あれは東京にくる方便だろ？　もうあんな約束はご破算でいいんだよ。
風子　民夫はそれで良いのね？
民夫　良いも悪いも結婚なんて考えられないよ。

そこへ、玄関から白衣姿の冴子が現れる。

冴子　ただいまー。
風子　冴子さん。お帰りなさーい。
民夫　あれ。白衣姿で何処に行ってたんすか？
冴子　この先に診療所できたでしょう？
民夫　あ、あのセツルメント…。
風子　セツルメントって何んですか？
冴子　元々は、オックスフォード大学の学生らがＡ・トインビー教授を中心に、労働者の教育にあたったのが、セツルメント活動の始まりでね。日本では外国人宣教師によって、明治時代に東京帝国大学に、学生セツルメント誕生したのよ…。
民夫　へえー。長い歴史あるんですねー。
冴子　下町の低所得者層に、様々な働きかけを行ってね。診療所はその医療分野で、ボランティア活動のハシリなのよ…。
民夫　随分、奥が深い活動なんですね？
冴子　この地域は、病気でも病院に行けない人が多いでしょ？
風子　確かに風邪引くと長く咳してますね。
冴子　それで慶応の学生セツルメントが、大学病院の医師と相談して、町の有力者と開設したのが、セツルメント診療所よ。
民夫　風邪引いたらいらっしゃい。
冴子　昼は配送の手配から経理の仕事。夜は看護学校に通いその上で奉仕活動…冴子さんの生き方に憧れちゃうな。
民夫　医療現場で学べるから、診療活動は一石二鳥なのよ。
冴子　いやー。何よりも行動が先です。風子も少しは冴子さんを見

習うといいぞ。
風子　何よ、偉そうに。私がデザインした洋服が、店のショーウインドーに飾られているんだからね。
民夫　えっ、本当かよ。俺もウカウカできねーな…
冴子　凄ーい。観に行かなくちゃー。
白鳥　冴子くーん。

通路から「ワンカップ」を持った白鳥が現れる。

白鳥　売上げ帳を見せてくれんか…。
冴子　はーい。かしこまりました。（と、事務所へ去る）
白鳥　（風子に）店の売れ具合はどうだ？
風子　最近は売れ残りが多いですね…。
白鳥　（番重を覗き）うむ。処分するのは勿体無い。菓子パンは蒸して、もう一度店に並べなさい…。
風子　蒸したパンは、評判が良くないですよ。
白鳥　半値にして売り切りなさい。食パンはラスクの材料に使うから、工場に回しておきなさい。
風子　そんなやり方で、いいんですかねー。
白鳥　しっかり火を通せば大丈夫だ…。ん、民夫。そんな所でごろ寝してちゃ疲れがとれんぞ。部屋に上がって布団で寝ろ！
民夫　（起き上がり）はーい。
冴子　（出てきて）今月の売上げ帳です…。

白鳥、帳簿を繰りながら通路へ去る。

そこへ、玄関から倉科が現れる。

倉科　寒いよー。　桜の季節ってぇのに雪だよ。
風子　得意先周りご苦労様です。
倉科　冴子さん。バッチリ注文とってきましたよ。
冴子　凄いじゃない。新規の得意先を開拓したのね！
倉科　営業成績上げないと、給料上がりませんからね。
冴子　はい。工場長に伝えておくわよ。
倉科　へへっ、今月の給料が楽しみだなあ。
民夫　深夜の残業代もお願いしまーす。
冴子　工場長に直接交渉しなさい。（と、事務してへ去る）
民夫　くー。何時もこれだよ…。
倉科　温い窯番が贅沢言うんじゃねぇよ。
民夫　寒い季節はいいが、夏は灼熱地獄ですよ。
倉科　ま、楽あれば苦ありってよ。我慢するんだな…。

と、倉科が番重のパンに手を伸ばす。
空かさず風子が倉科の手を叩く。

風子　ダメです！
倉科　痛てーな。何すんだよ？
風子　売れ残りは蒸して売り切る。工場長のお達しです！
倉科　えーっ。家に持って帰るも分ないの？
風子　売れ残りの売れ残りが、出たら好きなだけどうぞ。
倉科　何だよそれ？　売れ残りの売れ残りなんか、カビ臭くて食え

たもんじゃねぇよー。

風子　火で焼けば食えるって。工場長が…。

倉科、早業でウグイスパンをくすねる。
それより早く倉科の口にアンパン詰める。

風子　食べるならアンパンにしてください！

倉科　凄えー。早業！

冴子　（小窓から）それで三個目だからねぇ。

倉科　（肩を竦め）凄えー地獄耳…。

真一・朱実の声　安保反対。安保反対！

民夫　来ました来ましたよ。（と、通路へ去る）

真一・朱実　日米安保反対！　日米安保条約ハンターーーイ！

玄関からスクラム組んだ真一と朱実が現れる。

真一　やあ、労働者諸君。お早よーっ！

倉科　何がお早うだよ。今何時だと思ってるんだ！

冴子　真一さん。朝の集配どうしたのよ！

真一　「日米安保条約」の議論が白熱して、講内に泊まり込んで、大議論なってさあ…。

朱実　あたしは飲み過ぎちゃったー。

冴子　言いわけ無用。日米安保の議論より、パンの集配作業が最優先の課題でしょ！

真一　何を言ってるんですか。冴子さん？　日米安保条約は日本とアジア人民の運命左右する、重大な政治問題なんですよ！

倉科　真一。手前ぇの頭のハエも追えねぇで、仕事サボってぐだぐだ能書き垂れてんじゃねぇよ！

真一　欽次、世界の歴史ってのは夜に創られるんだよ。

冴子　お酒を飲みながらあ？

真一　酒はある種の自己批判。戦意高揚の手段です！

倉科　ふん。革命家気どりの甘ちゃん学生が、酒を喰らってオダ上げる理由にしちゃあ立派だよ…。

そこへ、「安保反対！」の子供の声が聞こえてくる。

真一　ほらー。子供だって戦ってるんだ。大の大人が惰眠を貪って、恥ずかしいと思わないのか？

倉科　馬鹿野郎。あれは「安保ゴッコ」で遊んでんだよ！

真一　お前じゃ話にならん。風ちゃんはどう思う？

風子　えーっ。私ですかあ？

真一　いくら政治に無関心な風ちゃんでも、これだけ新聞やラジオで騒がれてるんだ。良い事か悪い事か位は分かるだろう？

風子　うーん。私には日米安保より、田舎の「あんぽ柿」の実りの方が、重大な関心事ですね。

真一　あんぽ柿ーっ？　風ちゃん真面目にやってよ。「日米安保条約」の政治を話してるんだよ！

倉科　あはははは、良いね良いね。日米あんぽ柿条約。アメリカにあんぽ柿をしこたま売りつけて、日米の経済摩擦が原因で、第三次世界大戦勃発なんて最高だぜ。（と、腹を抱えて笑う）

真一　欽次。馬鹿笑いは止めろよ！
民夫　はーい、お待たせしました。第三回働く青年の交流、『新宿御苑の集い』のチラシが出来ましたよー。

と、通路から民夫が来てチラシを配る。
真一と朱実がテーブルに座りチラシを見る。

真一　いいねぇ。イラスト入りのチラシ…。
朱実　格好いいじゃん。さすが未来の挿絵画家…。
倉科　ケッ、また「あすなろう」か…。

倉科と風子がテーブルから離れる。
民夫、真一と朱実に別の紙を配る。

民夫　これが今の参加状況です。「あすなろう」の参加目標三十名に対して現在二二名。目標まであと八名です…。
真一　他のサークルの集まりはどうだ？
民夫　「緑の会」四十名のところ二十三名、「根っこの会」が四十名に対して二十九名、「がらくたの会」が四十名に対して三十五名。「四葉の会」が三十名に対して二十七名…目標が二〇〇名だから…。（と、数えて）後三十四名ですね…。
真一　うん。この様子なら目標は越えるな…。
民夫　冴子さん。参加してくれますよね？
冴子　悪いけど診療所の集団検診あるからパス！
民夫　それは残念。風子は行くだろう？
風子　ブティックの「発表会」で遊んでる暇ないわよ。
民夫　風子、これは遊びじゃないよ。集団就職で地方から出てきた若者と、学生や青年労働者たちの、学習の集まりなんだ。一回くらい参加してみろよ…。
風子　私の学習は、ファッションが最優先よ！
朱実　勿論。兄ちゃんは行くよね？
倉科　行かねぇよ。大体原っぱでロシア民謡を歌って、フォークダンスなんて、軟派のやることよ軟派の…。
朱実　あ、民夫くーん。忘れてたー。
民夫　え、何を忘れたの？
明美　「シャンゼリゼ」の聖子ちゃんが、良い男がいっぱい来るって誘ったら、ウエートレス仲間を連れて。来てくれるって！
民夫　えーっ。それは嬉しいなあ。
倉科　何っ。「シャンゼリゼ」の聖子ちゃん…。

倉科、電話に走りダイヤルを回す。

朱実　（ほくそ笑み）へへっ。一人確保っと！
真一　そんなんで、欽次が来るかあ？
朱実　熱上げてるから。一方的だけど…。
倉科　あ、聖子ちゃん。欽次だけど…。
朱実　へへっ。絶対来る！
倉科　あのさあ、「新宿御苑の集い」行くって本当？　うんうん…晶ちゃんと美っちゃんも…うん。後で店によるよ…。（と、電話を切り）よーし。俺も集いに参加するぞ！

朱実　（親指立て）ねっ？　あと四人！
真一　残りは学生仲間を連れて行くよ。（と、立ち上がり）「新宿御苑の集い」終わったら、「安保反対集会」に行かないか？
倉科　何ーっ。「安保反対集会」だと？
真一　遊びのサークルも大事だが、我々日本の将来を担う若者が、政治に目を向けることが大事だ…。
朱実　真一さん。デモ行進するの？
真一　ああ。日比谷公園から新橋まで行進するよ。
朱実　あたし行くー。デモしたかったんだー。
民夫　よし。俺も参加するぞ！
真一　おっ、いいね。我が同志！
倉科　何が同志だよ。安保のあの字も知らねぇのが、デモ行進して何の意味があるんだ。
朱美　いいじゃん。お兄ちゃんも行こうよ。
倉科　行かねぇよ！
真一　一致団結が大切だ。欽次、お前もこいよ！
倉科　バカ言え。「新宿御苑の集い」終わったら、聖子ちゃんたちとダンスホールで踊りまくるの…。
真一　欽次、日本の将来掛かってる正念場に、女の尻追っかけてる情勢じゃないぞ！
倉科　真一、俺の親父はお前の親父と違って、雨が三日も降りゃ顎が干上が、ヨイトマケのニコヨンだ。病気のお袋は俺がもって帰る、売れ残りのパンを待ってるんだ。安保だのデモだのに付合ってる暇はねぇよ。
真一　お前はいっつもそれだ。貧乏を売り物にしてよ！
倉科　何だと手前ぇ。「親しきなかにも礼儀あり」ってな。言って良いことと悪いことがあるぞ！
真一　少しは朱実ちゃんを見習ったらどうだ。同じ家に生まれ育って何でお前は卑屈なんだ？　いいか欽次。貧乏だっていうならそこから抜け出す、抜本的な解決策を探せよ。政治が変われば生活も変わる。ちっとは前向きに考えろよ！
倉科　馬鹿野郎。こんな所でアジってんじゃねぇよ。そういやあ、此処の社長はお前の親父だったな。世の中を変えるっていうなら、劣悪な労働環境の改善を図ったらどうだ！
朱実　兄ちゃん。それ以上はやめな！
真一　ふん。自分で掛合うんだな。ストライキやるなら力貸すぞ！
倉科　真一。俺たち貧乏人は、スネっ齧りのマルクスボーイと違って、集会やデモじゃ飯食えねぇんだよ。「日米安保反対」なんて糞喰らえだよ！
冴子　はいはい。二人ともそこまでよ。真一さん。思想信条の押付けはよくないわよ！
民夫　いやー。無関心はよくないですよ。
倉科　何だとこの野郎。スッカリ真一の手先になったか？
真一　民夫はお前と違って「あすなろう」で学習してるんだよ。
倉科　なーんだ。「あすなろう」はそういうお勉強もするんだ。やめたやめた、俺はやっぱり行かねぇぞ。朱実、お前もやめとけ。お勉強出来ねぇんだからよ。
朱実　あたしはあたしよ。お兄ちゃんと一緒にしないでよ！
民夫　「あすなろう」は主義主張の集りじゃないんです。例えば俺は挿し絵画家。朱実ちゃんはラインダンサー。冴子さんは看

護婦。風子はファッションデザイナー。「あすなろう」は明日はなろうという。働く仲間の集まりなんです。

倉科　ふん。甘いこと言ってんじゃねぇよ。

朱美　兄ちゃんには夢がないの？

倉科　あるさ。金をしこたま稼いで、父ちゃんと母ちゃんを楽させてやるのが夢だよ！

真一　まったく。プチブル思想に毒されやがって…。

倉科　ふん、何とでもほざけ。金に苦労したことがねぇ、お前に貧乏人の気持ちは分からねぇよ！

民夫　お金を稼ぐって、立派な夢じゃないですか？

倉科　ふん。安保反対なんて好き勝手に暴れて、大学を卒業すりゃあ、社長の椅子が用意されてる真一と違って、俺たちは一生あくせく働くんだ。政治変えていい世の中なんて、陳腐な夢見てる場合じゃねぇよ。

真一　俺は終戦のどさくさに、軍事物資を隠匿して興した、パン工場なんか継がないよ。

冴子　パン工場を継がないで何になるの？

真一　俺の「あすなろう」は束縛されない自由な生き方さ…。

倉科　恵まれた環境を捨てて、そんな事ができるもんかね？

真一　経済的に恵まれたって、幸せとは限らないよ…。

倉科　馬鹿野郎。金がありゃあ、どんな幸せも叶うんだよ！

井上　お取り込み中すまないねぇ…。

と、玄関からダボシャツ姿の井上が現れ、チャリチャリッ！　雪駄の音を鳴らして室内を歩き回る。

その手に「風月パン」の袋を握っている。

井上　こんな小汚ねぇ所で作ってんじゃ、パンの中に鼠の死骸が入っていても不思議じゃねぇな…。

冴子　あのう。どちら様でしょうか？

井上　これは、ここで作ったパンに間違いねぇか？

冴子　確かに当店のものですが。何か…。

井上　何かじゃねぇよ。これをよーく見ろってんだ！

冴子　ぎゃああ。ゴ、ゴキゴキ…ゴキブリーっ！

と、血の気が引いた冴子が椅子にへたり込む。

民夫　さ、冴子さん大丈夫ですか？

井上　お前ぇらの所は、客にゴキブリパンを売ってるのか？

民夫　（パンを受け取り）ゴキブリ入ってたんですか？

井上　おうよ。よーく見やがれってんだ！

民夫　風子。新しいパンを持ってこいよ。

風子　うん…。（と、パンをもって通路へ）

井上　おうおう、ネェちゃん。どこ持って行こうってんだ？　こちとらガキの使い走りじゃねぇんだ。保健所に届けでりゃあ、一週間や十日の営業停止はまぬがれねぇんだぜ！

風子　ですから新しいパンとお取り替えを…。

井上　新しいパンとお取り替えだ？　親切に下手に出てりゃあよ。チーっとも話が見えてねぇようだな？

朱実　風ちゃん。パンを見せて！（と、引っ手繰る）

井上　小便臭いお前らじゃ話ならねぇ。責任者を出せ責任者を！
風子　あ、はい。ただいま。（と、通路へ去る）
井上　シケた雁首並べやがって、茶もでねぇのか空っ茶もよ！

と、ダボシャツの袖を捲り、「しのぶ命」の刺青を見せる。

民夫・倉科・真一　おおっ。「しのぶ命」だよ…。
朱実　（井上の前に出て）おう。チンピラやくざ。黙って聞いてりゃ、大層な元気じゃないの！
井上　（目を剥いて）チンピラやくざだあ？　誰に向かって洒落たことを抜かしてやがるんだ！
倉科　あ、朱実やろよっ！
朱実　うちの店にもよく来るんだ。鼻糞を丸めて鼠の糞が入ってたとか抜かして、ただ酒をせびるチンピラやくざがさ。
井上　何だあ。このチンコロネェちゃんは？
真一　朱実ちゃん。逆らっちゃまずいよ！
朱実　放して。（真一を振り切り）あたしいま気がたってんの。やい、チンピラやくざ！　こんな貧相なゴキブリを持ってきやがって、うちの工場で飼ってるゴキブリは、栄養満点でギラギラ黒光りして、カブト虫みてぇに丸々と肥えてんだよ！
井上　糞ガキが。ペラペラ言いてぇ放題ぬかしやる。
朱実　ふん。どうせ小汚ねぇ、台所の痩せゴキブリ捕まえて、フライパンで煎殺してパンに細工したんだろ？　こんなのはラーメンの丼にでも入れときな！
井上　どうでも痛い目に合いてぇようだな！

井上、パッとダボシャツを脱ぎ捨てる。
背中に半端な刺青が踊っている。
負けずと椅子に片足を乗せ太腿を見せる朱美。

朱実　ふん。そんな虚仮脅しは通用しないよ！
倉科　朱実やめろよ。（と、割って入り）どうもすみませんねぇ。
井上　何だ、おめぇは？
倉科　へい。こいつの兄貴なもんで…。
井上　兄貴だあ？　兄貴ならちゃんと躾けとけ。アホンダラ！
朱実　アホンダラはどっちさ。お前の躾けは誰がしてんだい！
白鳥　ほう、随分と勇ましい眺めだねぇ…。

と、白鳥とパンの袋を抱えた風子が現れる。

井上　おう。あんたが責任者か？
白鳥　朱実。大根足を下ろしなさい。
朱実　へへっ、一度やって見たかったんだー。
白鳥　（井上に）命拾いをしたね。彼女は空手三段の猛者だよ。
井上　嘘こきやがれ。こんなチンコロスベタ…。
白鳥　嘘と思うなら駅前交番で聞いてみな。絡んだチンピラを病院送りにしたばかり。（と、パンを摘み）これが問題のパンか？
井上　おうよ、よーく見やがれってんだ。ゴキブリパンを売りやがって、キッチリ落とし前をつけて貰うぜ！
白鳥　これはめずらしい。痩せているが卵を孕んでおるな。

井上　お、おうよ。そんな気色の悪いもんを、危なく食っちまうところだったぜ！
白鳥　こんな貴重なご馳走は久しぶりだ…。
井上　何っ。久しぶりのご馳走だあ？
白鳥　ああ、大陸の戦場以来よ…。

白鳥、ゴキブリを摘んで口の中に放る。

井上　あーっ。あんたーっ！
冴子　ぎゃあーっ。食べたあ。おえーっ。（と、卒倒する）
井上　な、何てことするんだ。証拠隠滅だあ！
白鳥　うーむ、懐かしい味だ…。（と、酒で口を漱いで飲み下し）君は戦争に行ったかね？
井上　な、何でぇ藪から棒に？　戦争に行く歳じゃねぇよ！
白鳥　人間は飢えると自分の小便を飲み、塹壕の土塊でさえ口にする。兵士は一匹の野鼠を奪い合い、バッタやコオロギなどは先を争って食ったものさ。
井上　だ、だから何だってんだ。ここは戦場じゃねぇだろうが！
白鳥　うん。それはそうだな…。

と、井上の手首を掴んでねじ上げる。

井上　あっ。何をしやがる。痛てぇ、痛てぇよーっ！
白鳥　ほー。「しのぶ命」なあ。お前の思い人か？
井上　そうだよ。だから何だってんだ。は、放せよーっ！
白鳥　このしみったれじゃ、その思い人も泣かせておるな？
井上　し、仕方ねぇだろう。赤線廃止なってからこっち、すっかり顎が干上がってよ。世過ぎ身過ぎがままなれねぇんだ！
白鳥　岸内閣の「三悪追放」のトバッチリで、やくざ社会も被害甚大って分けかい？
井上　そうだよ。あの出っ歯野郎のお陰で、夜の灯りが消えちまってよ。世の中にゃ必要悪があるでしょ？　えっ、なーい？
白鳥　散々女を食いものにして、強請り集りというわけか…。

と、突き放し井上が床に転がる。

井上　畜生っ。あんた後悔することになるぜ！
白鳥　何処の組の者だ？
井上　この界隈を仕切る北辰会よ！
白鳥　しみったれの北辰会か。今の親分は誰だ？
井上　へっ。聞いて驚くな。背中の般若を拝みゃ、泣をく子もひきつけ起こす辰五郎親分よ！
白鳥　ほう、馬鹿辰が親分か。奴は元気でやっとるのか？
井上　（腰を引き）へっ。親分をご存知で？
白鳥　ガキの頃からの幼馴染よ。
井上　へっ、ガキの頃からの…。
白鳥　戦場じゃ儂の部下だったが、何をやってもドジな男でな。お前の醜態は黙っておくから、白鳥の所に顔を出せと伝えろ！
井上　へへーい？　（と、へなへな縮みこむ）
白鳥　民夫。まだ起きているのか？

民夫　あ、はーいっ。
白鳥　早く。糞して寝ろ！

と、楊枝を鳴らして通路へさる。
全員、ぽかーんと白鳥を見送る。

井上　おい。行っちゃったよー。
倉科　行っちゃいましたねー。
朱実　へへ、おっさん。気の毒しちゃったねぇ。
風子　（袋を差し出し）はい。出来立てのパンです。
井上　おっ。いいのかい？　（と、手刀を切り）サンキュー。

井上、ダボシャツとパンを抱えて玄関へ去る。
全員、ププーッ。と吹きだして笑い転げる。

民夫　あー。びっくりこいたあ。
真一　あの腑抜けと思っていた、叔父貴がな…。
倉科　流石、帝国軍人の貫禄は半端ねぇや。
風子　私は、朱実ちゃんの啖呵に痺れたわ。
朱実　へへっ。（と、腕を撫す）
民夫　それより冴子さんの…あれーっ？
倉科　おいおい。伸びちゃってるよー。
風子　よっぽどゴキブリが嫌いなのね。
真一　事務所に寝かそう。民夫、足の方を持って…。

と、民夫と真一、風子が冴子を通路へ運び去る。

倉科　お前が逆らうから、あんな騒ぎなったんだぞ。
朱実　へへ、ごめんなさーい！。
倉科　もう帰れ。仕事行く時間だろう？
朱実　可愛い妹から。大好きな兄ちゃんにお願いがあるの。
倉科　何だよ？　金ならねぇぞ！
朱実　何よ。まだ何にも言ってないじゃない。
倉科　先月貸した金も返してないぞ。大体俺より稼いでるくせに、何で金が無いんだよ！
朱実　洋服とか靴とかの月賦の支払いよ。
倉科　金ねぇのに買うんじゃねぇよ。
朱実　だって同じ洋服じゃ、お客さん逃げちゃうもん。（と、指を三本立てて）三千円でいいからさ…。
倉科　馬鹿、そんな金持ってねぇよ。
朱実　やっぱし、真一さんに頼むかー。
倉科　朱実、それだけはやめろ！
朱実　何でよー？
倉科　あいつに借りたら俺の立場がねぇ。
朱実　じゃあ都合してくれる？　支払い期限は明日なんだけど。
倉科　明日だあ？　（と、腕を組んで思案する）
朱実　遅れると利息が高いんだよねぇ。
倉科　ああ、分かった。分かったからお前は家に帰ってろ！
朱実　おー怖。よろしくねぇー。

朱実、ほくそ笑んで玄関へ去る。
倉科、回りを確認して通路に消える。
開けっ放しの玄関から田所が現れる。

田所　どなたかおりませんか？　随分と無用心だなあ…。（と、チラシを手に取り）ふーん。「あすなろう」ねぇ…。

そこへ、通路から一斗缶を抱えた倉科が現れる。
田所にギョッとなり立ち竦む。

倉科　あのー。どちら様で？
田所　やあ。これはどうも失礼…。（と、倉科の顔を覗き）あれ？　お前は鉄屑拾いしていた欽次かあ？
倉科　えっ？
田所　ああ、やっぱり欽次だあ。
倉科　（一斗缶を下ろし）あーっ。田所さーん！
田所　こんな所で何してるんだ？
倉科　何って、此処は俺の職場ですよ。
田所　そうかあ。此処で働いてんのかあ。
倉科　田所さんこそどうして？
田所　また、四谷署に戻ってきたんだよ。
倉科　ああ、四谷署に…。それで何か用ですか？
田所　いや、玄関。玄関開いてたんで、無用心と思ってさ…。
倉科　あ、それはどうも…。
田所　しかし、立派になったじゃないの。あの鉄屑ドロやっていたお前がさ…。
倉科　あれから、十年経ちましたからね…。
田所　妹の朱実は元気か？
倉科　はあ。元気にやってます。
田所　今、何やっているんだ？
倉科　相変わらずふらふらしてますよ。
田所　（一斗缶を警棒で叩き）で、これは何に使うんだい？
倉科　あ、これ。チョコパンの原料です。
田所　どこかに運ぶのかい？
倉科　仕込みの準備で工場へ…。
田所　工場は向こうじゃないのか？
倉科　いやあ。準備の準備で…。
田所　成る程、準備の準備ねぇ？　我々警察は住民の協力あってこそでな。これから時々寄らして貰うよ。それと、（と、ドアを警棒で叩き）戸締まりはしっかりな。
倉科　はーい。厳重にしまーす…。
田所　もう、未成年じゃねぇんだ。あんまり悪さするなよ。
倉科　ははは、はーい。
田所　ま、今後とも宜しくな…。（と、玄関へ去る）
倉科　糞ーっ！　最低最悪な奴が戻って来やがったなー。

と、思い切り一斗缶を蹴る。

倉科　うぅーっ。痛てぇーっ！

倉科、ケンケンで屋内を跳ね回る。
暗転。

―三場―　１９６０年　春

スケッチ帳が乗ったイーゼルが一脚。
玄関口には一斗缶が二個。
冴子がテーブルで伝票を繰り算盤を弾く。
通路から真一と倉科が現れて椅子にへたる。

真一　トラック一台分の入庫は、半端な量じゃないな。
倉科　俺はもう体力の限界。ゴホゴホゴホーッ。
冴子　倉科君。近ごろ嫌な咳してるわね？
倉科　ゴホゴホ…。倉庫は粉塵が酷いからね。
民夫　あれっ。もうグロッキーすか？

と、民夫が軽いフットワークで現れる。

倉科　俺たちの倍も運んでよく平気だな。
真一　お前の馬力は何処から出るんだ？
民夫　田舎の肥えたご担ぎや、炭俵運びに比べたら、こんなのはお茶の子ですよ。それと中学校の通学は、片道十キロの峠二つの山越えでしたからね。
真一　えーっ。歩いてか？
民夫　走ってです。毎日往復二十キロのクロスカントリー。東京育ちとは鍛え方が違いますよ。
倉科　道理でデカイ尻なわけだ。
民夫　（一斗缶を持ち）倉庫は整理しますから、二人は休憩していてください…。

民夫が持った缶が倉科の臑に当たる。

倉科　あっ。痛てーな！
民夫　短い足を長くしてるからですよ。
倉科　あの野郎。謝りもしねぇで…。
冴子　短い足を長くって。民夫君も成長したわねぇ。
倉科　何だよ。冴子さんまで…。民夫の野郎。生半可にマルクス主義をかじって、テングになってねぇか？
真一　「あすなろう」のリーダーだからな。
倉科　此処らで鼻をへし折ってやるか…。
冴子　生意気は成長した証よ。対等に扱ってあげなさい。倉科君は民夫君を苛め過ぎよ。
倉科　あれ。やけに民夫の肩を持ちますね。何かあったのかな？
冴子　何よ。何もある分けないわよ！
倉科　冴子さん。顔が赤いよ？
冴子　馬鹿を言わないでよ！　（と、倉科の臑を打つ）
倉科　あーっ。痛いところをよー。（と、脛をさする）
真一　（冴子に）随分、伝票チェックが念入りですね？
冴子　在庫と伝票が合わないのよ…。
真一　えーっ。またこそ泥ですか？
冴子　金額にして三万円ほどよ。

倉科　えっ。警察には届けたんですか？
冴子　工場長が暫く様子を見ようって…。
真一　しかし、あの厳重な倉庫からどうやって…。
冴子　真一さん。伝票と在庫付合わせるから手伝って…。
真一　あ、はーい。（と、通路へ去る）
倉科　そろそろ止めねーとやべーな…。

そこへ、水前寺清子の『いっぽんどっこの唄』を歌って、コーラをラッパ飲みして朱実が現れる。

朱実　おんちわー。あれ、お兄ちゃん一人？
倉科　朱実か。何か用か？
朱実　だい好きなお兄ちゃんの表敬訪問…。
倉科　金の無心ならねぇぞ！
朱実　そん事は分かってるよーだ。
倉科　何だその醤油みてぇな飲み物は？
朱実　コーラよコーラ。アメリカのラムネよ。飲む？
倉科　どれどれ…。（と、一口飲み）ぷはーーっ。ハクショーン！何だこりゃあ。ツーンと鼻にきやがったぜー。
朱美　慣れると癖になって止められないよー。
民夫　おっ、朱美ちゃん。

と、通路から民夫が現れる。

民夫　流行のニューファションだねー。
朱実　分かる？　バーゲンの安物だけど…。
民夫　朱美ちゃんは、流行の先端を行ってるなあ。
朱美　民夫君の絵は、代わり映えしないねぇ？
民夫　数は描いてるけどね。近頃はマンネリでさ…。
倉科　ハイキングだの川遊びだのって、「あすなろう」で遊び呆けて、民夫の絵は魂がねぇからな。
朱実　それにこの文章はなーに？
民夫　田舎に手紙書く位だから、文章はからっきしでね…。
朱実　挿絵画家になるなら、いっぱい小説を読まなくちゃー。
倉科　偉そうに。お前は小説を読めるのか？
朱実　難しい辞書と首っ引きでね…。
倉科　そんな暇あるなら金を稼げ。借金あんだからよ。
民夫　辞書と首っ引きで小説を読むって。凄いじゃないですか？
倉科　無駄だよ無駄。一銭にもならねぇ努力が何になる。民夫も挿絵画家なんか諦めちまえ。
民夫　倉科さん。今日は変に荒れてますね？
倉科　変なのはお前らさ。二兎追うもの一兎も得ずだよ！
真一　今回は伝票と在庫が一致しましたね…。
冴子　入庫したばかりだからね…。

と、通路から真一と冴子が現れる。

朱実　お邪魔してまーす。
真一　おっ、朱美ちゃん！
冴子　久しぶりね。元気にしてたの？

朱美　はーい。元気だけが取り柄ですからー。
真一　今、何してるんだい？
朱実　トリスバー「黒猫」のホステスでーす。

と、全員に名刺を配る。

民夫　あれー、「茜」って？
朱実　あたしの源氏名さ。店じゃ「茜」で通してんの。
真一　武蔵野館の近くだな。付けで飲めるのかい？
朱実　真一さんなら特別サービスするよー。
真一　嬉しいね。付けで飲めなんて！
朱実　で、真一さんにお願いがあるんだー。
倉科　馬鹿。こんな所で営業するなよ。
真一　俺に頼みって何だい？
朱実　チョッと、みんなの前じゃねぇ…。
真一　ここにのみんなは仲間だよ。
朱実　そう言えばそうね…真一さん。お金を貸してください！
倉科　あー、やめろよ。みっともねぇ！
真一　いいじゃないか。いくら必要なんだい？
朱実　……。（指を三本を示し）
真一　（財布を出し）三千円でいいの？
朱美　ううん。一桁上の三万円…。
民夫・倉科　えーっ。三万円！
真一　流石に三万円の手持ちはないな…。冴子さーん！
冴子　お金の無心は駄目よ。真一さん。私が留守のとき金庫から、二万円持ちだしたでしょう？
真一　あれは…カンパ足りなくて、支払いの立て替えに…。
冴子　その立て替えが、何で飲み屋の領収書なのよ？
真一　領収書ないと、事務処理困ると思って…。
冴子　大体、朱実ちゃん。そんな大金を何に使うの？
朱実　実はＳＫＤの一次試験受かったのー。
倉科　えっ。ラインダンサー受かったのか？
民夫　おめでとう。朱実ちゃん！
朱実　それが、あんまりめでたくないのー。
冴子　どうしてよ。二次試験の費用が足りないなら、鬼の冴子さんも応援するわよ！
朱実　それが違うお目でたでねー。
民夫　えーっ。違うお目でたって？
朱実　赤ちゃん。出来ちゃったー。
真一・民夫・冴子　えーっ！
倉科　（コーラを吹き）ぶはーっ。ゴホゴホ…。な、何だとこの馬鹿野郎が…。
冴子　朱実ちゃん。借金は中絶する金ってこと？
朱実　だーって、赤ちゃん育てられないもーん。
冴子　ご両親に相談をしたの！
朱実　冗談。ぶっ飛ばされちゃう。
倉科　当たり前だこの馬鹿。相手はどこのどいつだ！
朱実　馬鹿馬鹿言わないでよ。あたしが困ってんだから！
冴子　朱実ちゃん。チョット事務所にいらっしゃい！
朱実　あ、は～～い。

と、冴子が朱実を事務室に連れ去る。

そこへ、通路から風子が現われる。

風子　真一さん、社長がお呼びですよ。
真一　（顔を曇らせて）えっ。親父が…。
風子　白銀台の叔母さんもお見えでしたよ。
真一　あの女も一緒に来てるのか…。
風子　そんなことを言って、お母さん代わりの人でしょ？
真一　おふくろの入院中に、親父と宜しくやった雌狐だよ…。
風子　（ドギマギして）えっ？　ごめんなさーい。
真一　気にしくていいよ。どうせ会社を継げって小言だ。さらっと断ってくるよ。
倉科　ああ、そうして来いよ。お前が社長なったら、俺はここ辞めなきゃならねぇからな。
民夫　どうしてそうなるんですか？
倉科　真一を社長なんて呼べるかよ！
真一　そんな心配いらないさ。労働者を搾取する側に回らないよ。
倉科　ご立派ご立派。俺なら搾取しまくるがね…。
真一　いっそこんな奴隷工場は、潰したほうがいいんだ。
民夫　それは無責任ですよ。多くの労働者いるんですから…。
倉科　おっ。いいぞプロレタリアート。もっと噛みつけ噛みつけ！
民夫　茶化さないでください。倉科さんも労働組合結成の、重要メンバーなんですからね！
真一　ふーん。労働組合作るのか？
民夫　まだ準備中ですけどね。そのうち職場の環境改善を掲げて、ガツンと闘いますよ！
真一　民夫、あの軍国主義者は手強いぞ。
民夫　覚悟の上です。真一さん応援してくれますよね？
真一　悪いが俺は見物させて貰うよ。
民夫　えーっ。いつも言ってる事と違いますね？
倉科　ふん。「親父に向かってナンセンス」なんてほざいてた。マルクス主義者もいざとなると、敵前逃亡ってわけかい。
真一　労働組合は、現場で働く者が主人公だ…。
倉科　ふん。お坊ちゃん学生が振り回す、似非かマルクス哲学なんて、百害あって一利無しだよ。

そこへ、電話が鳴り冴子が受話器をとる。

冴子　はい。風月パンです。はい…おりますが、どちら様でしょうか？　はい…真一さん。電話よー。
真一　誰だ。此処に電話してくるなんて？
冴子　（受話器を渡し）全学連の人だって…。
真一　あ、山本か…えっ。新宿駅に委員長が来てる…。
倉科　ケッ。革命家気どりの脛っかじりの集結か…。
真一　うーん。それは大きな金額だな…。（と、朱実から貰った名刺を見て）新宿駅中央口通りの、武蔵野館近くにトリスバー「黒猫」があるから、その店で待っていてくれ…ああ、何とか都合つけて行くよ…。（と、受話器を置き）よーし。全学連の委員長が、俺を頼ってきてくれたぞーっ！

朱実　（事務所から来て）「黒猫」行ってくれるのー？
真一　ああ、朱実ちゃんも一緒に行こう？
朱実　うわあ。嬉しいーっ！
冴子　あっ、朱実ちゃん。まだ話が途中よ！
朱実　また、改まって相談にきまーす。
倉科　まったくよ。「日米安保反対闘争」の全学連幹部が、バーで酒を喰らっていて良いのかねぇ？
真一　全学連の委員長は、タフガイの裕ちゃんより格好いいぞ。民夫も一緒にくるか？
民夫　はい。行きまーす！
真一　風ちゃんはどう？
風子　私はブティックがあるから遠慮します。
倉科　へへっ、振られてやんの。
真一　欽次は煩いんだよ。（と、小窓に走り）冴子さん。緊急事態発生。お金を貸してください！
冴子　駄目よ。金を渡すなって、社長から厳命されてるのよ！
真一　親父には俺が話つけるから…。
冴子　だいたい真一さん。全学連の活動は良いけど、何回も大口カンパなんておかしいわよ。社長の息子をいいことに、金蔓に利用されてるんじゃないの？
真一　今度の国会デモには、デカイ作戦があるんだ。これが終われば もうカンパはありません。だから今回だけお願いします！
冴子　拝んでも駄目なものは駄目っ！
真一　（土下座し）そこを何とか。北島真一、一生のお願いです！
民夫　冴子さん。俺からもお願いします。
朱実　あたしからも…。

と、真一に倣って土下座する二人。

冴子　もー。仕方がない！

冴子、小窓から顔を引っ込める。
真一、民夫と朱実にＯＫのサイン。

冴子　（出てきて）真一さん。此処のみんなが証人よ。絶対に今回限りの約束よ！
真一　はーい。約束は必ず守ります…。民夫、朱実ちゃん。戦闘開始だよーっ！　（と、玄関に走る）
倉科　待てよ。朱実！　（と、朱実の手を掴む）
朱実　えーっ、何でよー。
倉科　いいからお前は残るんだ！
朱実　真一さん。先に行ってぇー。
真一　おー、民夫。行くぞ！

と、真一と民夫が玄関から出て行く。

風子　朱実ちゃん。何があったんですか？
冴子　ＳＫＤの一次試験受かったのにね…。
風子　えーっ。朱美ちゃん凄いですね！
冴子　それが赤ちゃん出来たっていうのよ…。

風子　えっ。赤ちゃんですか？
冴子　堕ろす金の無心にきたのよ。ＳＫＤはアウトね…
風子　でも、朱実ちゃんパワーは凄いですね。
冴子　そのパワーがいい方に、向くといいんだけどね。
風子　大丈夫ですよ。朱美ちゃん逞しいから…。
冴子　それで風ちゃんの方はどうなの？
風子　えっ。何のことですか？
冴子　民夫君との進展？
風子　やだなあ。とっくに解消しましたよ。
冴子　えーっ。そうなの？
風子　もうこんな時間だ。行ってきまーす！
冴子　ふーん。許嫁を解消かあ…。

冴子、小窓を閉めて事務室へ去る。
暫しの間。
倉科、通路から顔を出して室内を覗く。

倉科　誰もいませんねぇー。
朱実　兄ちゃん。重いよう…。
倉科　我慢しろ。ガキを生む分けいかねぇだろ！
朱実　でもこんな事していいのかなあ？

と、一斗缶抱えた倉科と朱実現れる。

倉科　仕方ねだろ。金ねぇんだからよ。
朱実　やっぱり真一さんに頼もうよ。
倉科　真一は学生運動でいっぱいだ。お前に回す金なんかねぇよ。
朱実　へへっ、でもお兄ちゃん。鉄屑ドロを思い出すね。
倉科　馬鹿。つまらねぇこと思い出すなよ…。

と、缶を抱えて玄関に向かう。
突然、ガラッと外からドアが開く。
驚いた二人、同時に一斗缶を足に落とす。

倉科　うわーっ。痛てぇーっ！
朱美　ああ、痛たいよーっ！
田所　いよっ。久ぶりだねー。
朱実　あっ。田所のおじさんだあ？
田所　今日は朱実も仕込みの手伝いかい？
朱実　えへへ、まあねー。
田所　（朱実に）ＳＫＤの一次受かったって？
朱実　えっ、おじさん何で知ってんの？
田所　田所おじさんは、お前たち兄妹のことはお見通しさ。
朱実　嘘を付け！
倉科　朱実、後は俺がやっておくからお前は帰れ！
朱実　何でよ？　折角、田所のおじさんと…。
倉科　お前が居ると邪魔なんだよ！
朱実　（不満そうに）おじさん。またねー。
田所　おお、二次試験がんばれよー。
朱実　はーい。頑張るよーだ。（と、玄関から去る）

倉科　今日は、何の用です？
田所　折り入って頼み事があってな…。（と、煙草を進め）ま、一服やれや…。
倉科　（煙草を押し返し）頼みごとって何です？
田所　日米安保条約反対の集会で、血の気が多い全学連学生が、国会に突入するって情報があってな…。
倉科　そんな事をバラして良いんですか？
田所　昔馴染みのお前だからさ。ここの御曹司、真一と言ったな。全学連の金蔓やってるの知ってるな？
倉科　さあ。俺は政治に関心ねぇから…。
田所　（ポッケからチラシを出して）それと青年サークル、「あすなろう」の親玉もやっている。
倉科　真一が何か仕出かしたんですか？
田所　まだ何もしちゃいないよ。ただ危険を犯す心配あるんでな。「あすなろう」名簿が欲しいんだよ。
倉科　名簿なんか何に使うんです？
田所　なーに、危険な動きをに防ぐ為さ。誰にも傷つけやしないよ。
倉科　俺、その方面は無関心だから、外を当ってください。
田所　頼めるのは、お前しかいねぇんだよ…。

と、封筒を倉科のポケットにねじ込む。

倉科　（封筒を突き返し）勘弁してくださいよ…。
田所　頼むよ。名簿が手に入ったら報酬を弾むからさ。
倉科　田所さん。俺はもう昔の俺じゃないんだ！
田所　（警棒で一斗缶を叩き）欽次、どこが昔と違うんだ！

と、倉科の首根っこを掴み、一斗缶にねじ伏せる。

田所　会社にバラしてもいいのか？
倉科　バラすならバラせよ。会社を辞めりゃいいだけだ。
田所　ＳＫＤに、朱実の妊娠をバラす手もあるなあ。
倉科　糞っ。朱実は関係ねぇだろ！
田所　（倉科を突き放し）欽次、俺は公安刑事だよ。
倉科　クー。畜生ーっ。
田所　困ったときは歩み互い。俺たちの仲じゃねぇか…。
倉科　俺をどうしようというんだ？
田所　これは招待券だ…。今度の土曜日フランス座のストリップショーを観に来るんだ。ボインの可愛い娘が入ったんだ…。
倉科　冗談でしょう。俺は行来ませんよ！
田所　お前はくるさ。「あすなろう」の名簿を持ってな…。

と、現金封筒と招待券を一斗缶に重ねて去る。

倉科　（封筒を覗いて）こんなに…。名前だけだ名前だけ…どうってことねぇや…。

と、封筒とチケットをポッケに突っ込む。
両手に一斗缶を下げて通路に消える。
暗転。

―四場―　１９６０年　６月

仮縫いの洋服着た風子が現れラジオを捻る。
鶴田浩二の『赤と黒のブルース』が流れている。
風子、ガラス戸に自分の姿を映してステップを踏む。
そこへ、往診鞄を持った白衣姿の冴子が現れる。

風子　冴子さん。随分、遅い帰りですね？
冴子　今日は屑山の往診だったのよ…。
風子　あの朝鮮人街は大変でしょう？
冴子　セツルメントは、そう言う人たちの診療所だからね。とても遣り甲斐があるのよ…。（と、風子の洋服に気づき）あら、新作のファッション？
風子　（窓に向いたまま）脇がシックリこないんです…。
冴子　（風子の後に回り）ここを少し絞ったらどう？
風子　あらっ、スッキリしたー。
民夫の声　日米安保条約ハンターイ！

と、玄関から酔った民夫が現れる。

民夫　へへ、お二人さん。ただいま戻りましたー。
風子　もう、酒なんか飲んで…。
冴子　どう。風ちゃんの新しいファッション？
民夫　おっ。格好いいーなあ。（と、抱きつく）
風子　うっ。お酒臭い！（と、逃げる）
民夫　何で逃げるんだよー。
風子　ゲロ吐かれたら、ファッションが台無しよ。
民夫　へへ、俺たち労働者と違って、インテリゲンチャーは格好いいなー。
風子　民夫、明日は早番でしょう？
民夫　だからここで仮眠するんだ…。（と、作業台に伏し『インターナショナル』を歌う）ははは、万国の労働者は団結せよ。プロレタリアート万歳…万歳…。うむむむー。
風子　こんな所で寝たら風邪ひくよ！
冴子　もう、眠ってる…。

冴子が白衣を脱いで民夫の背中にかける。
風子が灯りを消し通路へ去る。
長い間。
グオー、グオーと民夫の鼾が聞こえる。
玄関のドアが開いて井上が現れる。

井上　（民夫の肩を揺すり）よー。兄ちゃんよー。
民夫　うむむー。グオーッ、グオーッ…。
井上　ちょっと、起きてくれねぇか…。
民夫　うむむむー。何だよ煩いなー。
井上　（民夫の耳元で）おい。アンたーっ！
民夫　うわーっ！　誰だこんな夜中に…。

と、慌てて電灯のスイッチを押す。

民夫　あっ。ゴキブリやくざ…。
井上　ゴキブリじゃねぇ。北辰会若頭の井上政吉よ。
民夫　その若頭がこんな夜中に何の用です？
井上　やあ、脅かして面目ねぇ。悪いがパン分けてくれねぇか？
民夫　まだ、店は開いてませんよ。
井上　なーに、売れ残りのパンでいいんだ。外に腹空した若い者を待たしてるんだよ…。
民夫　（箱を覗き）　売れ残りあったかなあ…。
井上　食えりゃあ、パンの耳でもいい…。
民夫　そんな。食中毒起こされたら迷惑ですよ。
井上　カビやゴキブリ程度で、腹を壊す柔な奴らじゃねぇ。

井上、民夫から箱を奪い玄関に走る。

井上　おう、野郎共。感謝して腹ごしらえしろや！
男１の声　あ、ありがてぇ！
男２の声　お兄ちゃん、ありがとうよ。

井上、パンを齧りながら戻る。

井上　兄ちゃん。名前ぇは何て言うんだ？
民夫　はあ。山川民夫と言いますが…。
井上　ふーん、山川民夫なあ。ありふれた名前ぇだが、覚えやすくていいやな。何か困った事があったら、この正吉に声かけてくんな。力になるからよ。
民夫　あ、はーい。これから出入りですか？
井上　出入りなら元気もでるが、赤線の灯が消えてからこっち、サツの取締りが厳しくてサッパリよ。
民夫　ははー。例の「三悪追放令」ですね…。
井上　おうよ。丘に上がった河童同然。すっかり顎が干上がっちまってこの体たらくよ。
民夫　ヤクザ屋さんも、岸内閣に恨みがあるんだ…。
井上　あるなんてもんじゃねぇ。あのギョロ目の出っ歯野郎には、恨み骨髄のコンコンちきよ。
民夫　その恨みを晴らしませんか？
井上　そう言ったっておめぇ。敵はあの頑丈な国会議事堂の中だあな。手も足も出せやしねぇやな。
民夫　その国会議事堂に殴り込むんですよ。
井上　えっ。お前ぇがかい？
民夫　いや、全学連…と言っても分らないか？
井上　分からいでか。ここの御曹司が頭やってる。「あすなろう」とかのあれだろう？
民夫　はい。「日米安保条約反対」のデモで殴り込みむんです。
井上　兄ちゃん、そりゃあちょっとばかり拙いや。こう見えても歴とした親分持ちの身だ。世話なったお前にゃ悪いが、デモや集会の参加は案配ぇ悪りーやな。第一ヤクザが仁義切ったぐれいじゃ、出っ歯野郎にゃ屁でもなかろうよ。

民夫　いや。正吉若頭の「しのぶ命」を拝ませりゃ、岸も赤絨緞にひれ伏すと思いますがね…。
井上　兄ちゃん。俺を揶揄ってんのかい？
民夫　飛んでもない。正吉さんの出番ですよ。
井上　そうか。俺もこの界隈じゃ、ちっとは名の知れた侠客のはしくれ。そうまで言われちゃあ、行かざあなるめぇなー。
民夫　（目を輝かし）ご一緒して頂けますか！
井上　白鳥のボスと御曹司のボンに、北辰会の政吉が子分を引き連れて、国会議事堂前に集結すると、伝えておいてくんねぇ。
民夫　（調子合せて）へえっ！　焼きたての熱熱パンを持参して、お待ちしておりやす！
井上　おう。そいつはすまねーな。

と、『人生劇場』を唸って玄関へ去る井上。
民夫、拳を握り小さくガッツポーズ。
暗転。

―五場―　一九六〇　六月一五日

「安保反対！　安保反対！」学生のジグザグデモ。
「学生諸君は直ちに解散しなさい！」
と機動隊の広報車からの放送などが入り乱れ、騒然とした雰囲気が舞台裏から聞えてくる。そこへ「岸内閣打倒！」「日米新安保条約粉砕！」のプラカードをもった風子、冴子、朱実とパンの入った麻袋を担いだ民夫、倉科、井上が「安保粉砕！　安保粉砕！」と下手から登場。舞台上手に向うが機動隊に押し戻されて立ち往生する。

朱実　真一さんは、どこだろう？
倉科　これじゃ、探しようねぇなー。
民夫　それにこのピケ隊だ…。
井上　パンを持って引き返しやしょうぜ。
朱実　駄目よ。真一さんは身体を張ってんだから！
井上　さいでやすがねぇ。これじゃどうにも…。
倉科　デモなんか来るんじゃなかったよ。
風子　あら。倉科さんは何で来たんです？
倉科　真一が可愛い子ちゃんいるって言うからよ。来てみりゃヘルメットとタオルで顔隠して、スクラム組んでジグザグデモなんて、可愛くもなんともねぇよ。
風子　もう、倉科さんは不純なんだから…。
倉科　あれ、風ちゃん。人のこと言えるのか？
風子　どういう意味ですか？
倉科　真一が心配で来たんだろう？
風子　違います。「安保反対」に目覚めたんです！
倉科　あれ、「あんぽ柿」じゃないのかい？
井上　おっ。塀の上の学ランは真一の若じゃねぇかい？
朱実　えっ。何処よ？
民夫　本当だ。真一さんだよ！

風子　あんな所に登って危ないわー。
朱美　真一さーん。格好いいよ。やれやれーっ！
井上　学生らが門を揺すってやすぜ。
倉科　彼奴ら国会に突入する気か？
民夫　真一さんの言っていた、デカイ作戦てこれか…。
風子　あっ、危なーい。門を壊して突入した！
倉科　真一が中に飛び降りやがったぞ！
風子　真一さーーーん！
民夫　あっ。危ないから戻ってこいよ！

と、倉科、井上、風子、民夫、朱美が通路奥に消える。
奥から激しく物が当たる音と怒号。
民夫と朱実が押し返されて地面に倒れる。

民夫　うわーっ。痛てぇ！
朱実　あっ。機動隊が動き出した！
民夫　真一さんたちは？
朱実　警官隊と揉み合いなってるーっ。
民夫　朱実ちゃん。逃げるんだ！

と、民夫と朱実が下手に走り去る。
通路奥から風子がきて倒れ、風子に覆いかぶさる真一。
その真一を機動隊員が警棒で殴りつける。

倉科　この野郎。この野郎！

と、真一を襲う隊員を敷石で殴り倒す。
風子、真一にすがり身体を揺する。

風子　真一さん。しっかりして！
倉科　どこをやられたんだ！
真一　あ、足が、足がーっ！
井上　こりゃいけねぇ。早くあっしの背中に。
倉科　おお。（と、真一を井上の背中に乗せる）
真一　（苦しそうに）あ、あーっ。
井上　突っ走りやすんで。辛抱してくだせぇよ！

激しい怒号と物を叩く音の中、真一を背負った井上、倉科、
風子が下手に走り去る。
暗転。

―六場―　１９６０年　六月一五日　深夜

遠くからパトカーと救急車のサイレンの音。
ラジオから『アカシアの雨が止むとき』の曲が流れて、
白鳥がコップを酒を飲んでいる。
通路から冴子が現れラジオのスイッチを回す。
「安保反対、安保反対！」「帰れーっ。帰れーっ。機動

隊は帰れーっ！」のシュプレヒコールに入り混じり、「学生諸君は直ちにデモ隊を解散しなさい！」と機動隊広報車の声が聞こえる。

ラジオ実況の声　今、警官隊によって首をつかまれております。いま実況放送中でありますが、あ、警官隊が私の顔を殴りました…。

と、国会前の騒然とした様子が流れる。
そこへ、玄関から朱実と民夫が現れる。

朱実　こ、工場長ーっ！
白鳥　ん。どうした？
民夫　真一さんが国会議事堂に突入しました！
朱実　兄ちゃんと風ちゃんも…。
白鳥　学生の跳ねっ返り共が、挑発に乗せられたな…。
冴子　民夫君。足から出血してるわよ！
民夫　あ、機動隊が蹴飛ばした時だ…。
冴子　（民夫のズボンを捲り）酷く腫れてる…。

と、救急箱から包帯を出して手当する。
そこへ、真一を背負った井上と風子、倉科が現れる。
真一の背中に白い印がついている。

風子　真一さんが怪我をしました！
井上　若、着きやしたぜ！
白鳥　何処をやられたな？
真一　うう―っ。足が足が―っ！
白鳥　よし。台の上に寝かせろ！
真一　うおっ、うおーっ。うおーーっ！

民夫が手伝って真一を作業台に寝かす。
冴子、電話のダイヤルを回す。

白鳥　（手を押さえ）止めておけ！
冴子　この怪我はここじゃ、治療出来ませんよ？
白鳥　（真一の背中を指し）これを見ろ…。
冴子　この白墨の印が何か？
白鳥　私服がデモ隊に紛れて付けた目印だ。駅や病院に警察が張込んで、この目印を頼りに一網打尽にする作戦だ…。
倉科　えっ。じゃあ此処にも？
白鳥　来るだろう。冴子君。懐中電灯！
冴子　はい。（と、棚の懐中電灯を渡す）
白鳥　民夫。カーテン閉めて鍵かけろ！
民夫　あ、はい！

民夫、玄関に鍵を掛け窓のカーテンを閉める。

倉科　（頭を抱えて）糞―っ。何てこったよー。
白鳥　頭は心配ないが足はいかんな…。冴子君。大木戸接骨院に連

絡とってくれ！
冴子　えっ。良いんですか？
白鳥　院長とは幼馴染みの中だ…。

冴子、電話帳開いてダイヤルを回す。
白鳥、真一の口に布を噛ませ様子を探る。

冴子　あ…もしもし、夜分に恐れ入ります。大木戸院でしょうか…。
真一　ううーっ、うううーっ。
白鳥　堪えるんだ。この程度で死にはしない！
冴子　はい、作業中に怪我人が出まして…。はい、工場長の白鳥に代わります。工場長、院長先生です…。
白鳥　（受話器を受け）ああ、白鳥だ。国会周辺のデモの騒動で、救急車が出払って来んのだよ。うん。すぐ連れて行く…。（と、電話を切り）しかし、このままでは運べんな…。
白鳥　冴子君。添え木して足を固定してくれ！
冴子　はい！　倉科君、箱を壊して頂戴！
倉科　あ、はい…。（と、バールで箱を解体）
白鳥　（井上に）その腹巻を解いて足を固定してくれ！
井上　へーい。（と、腰に巻いた腹巻きを解く）
白鳥　（井上と民夫に）暴れないように押さえつけろ！
民夫・井上　はい。へーいっ！
白鳥　冴子君。シッカリ縛りあげろ！
冴子　風ちゃん。泣いてないで手伝いなさい！
風子　あ、はーい…。

と、冴子と風子が添木をサラシで止める。

真一　ううーっ、うおーーーっ。
白鳥　（倉科に）裏に車を回しておけ！
倉科　はい…。（と、通路奥へ去る）
白鳥　（口の布をとり）真一、聞こえるか！
真一　ううーっ…殺された…俺のせいで人が殺された…。
白鳥　うん。死人が出たか？
真一　俺が煽ったからだ…機動隊に囲まれて警棒で殴られ、鉄の靴で蹴飛ばされ踏みつけられて…。
風子　違う違う。真一さんの所為じゃないわ！
民夫　風子。真一さんに何があったんだ？
風子　分からない。私には何も分からない！
真一　ううー。俺が煽ったからだ…俺がみんなを煽って…彼女が俺の前で倒れて…俺が彼女を殺したんだ…。
白鳥　お前は助かった。今はそのことだけを考えろ！
倉科　車を裏に回しました…。

と、倉科が戻り壁を背にして踞る。
そこへ、ドンドンドン！
激しく玄関のドアを叩く音が。
一同、ギョッなって顔を見合わす。

田所の声　夜分すみませーん。警察の者ですがー。此処を開けてく

ださいーっ！
白鳥　もう来たか…。動かせるか？
冴子　（首を振り）無理です…。
白鳥　麻袋をかぶせて真一を隠せ！
民夫　えーっ。だってここじゃあ？
白鳥　いいから早くしろ！
民夫　あ、はーい？

と、民夫と井上が棚の麻袋で真一を隠す。

白鳥　真一、何があっても動くんじゃないぞ！
真一　うっ、うう―。
白鳥　冴子君。酒！
冴子　あ、はい！
白鳥　朱実、何でもいいから歌え…。
朱実　えーっ。歌ですかー？

と、朱実が『カチューシャ』を歌う。
冴子と風子が声を合わせて合掌する。
ドンドンドン！　更に激しくドアを叩く音。

田所の声　開けないと、ドアを蹴破りますよ！
白鳥　民夫。開けてやれ！
民夫　えーっ。いいんですか？

と、民夫が錠を外してドアを開ける。

田所　お寛ぎの所すまないねぇ…。（と、入り外に向かって）廻りを囲んでおけ。はいはーい。歌をやめてーっ！
民夫　こんな時間に警察が何の用です？
田所　人を探していてね。怪我人…。
民夫　ここには怪我人なんかいませんよ。
田所　怪我人を担ぎ込まれたのを、見たと通報があってね…。
民夫　廃品回収と間違えたんですよ？
田所　兄ちゃん、トボケちゃ駄目だよ…。

と、田所が麻袋に警棒を差し込む。

田所　一体これは何かね？
民夫　パンの生地です。触らないでください！。
田所　ふーん。パンの生地ねぇ？
民夫　ガスが抜けたら、商品ならないんです。
田所　成る程な…。（と、警棒で救急箱を叩き）で、この救急箱は何に使ったのかな？
民夫　（脛を見せて）俺が使ったんだ。
田所　いるじゃないの、怪我人…。
倉科　ガタガタ煩いな。静かにしろよ！
田所　おっ、誰かと思えば欽次君じゃないの。
民夫　倉科さん。知り合いなんですか？
倉科　餓鬼の頃からな。四谷署の糞刑事だよ！

田所　鉄屑ドロが大口叩いていいのか？
倉科　帰れよ。あんたの探す怪我人はいねぇよ！
田所　シラ切るなら、工場の中を調べさせて貰うよ。
冴子　（田所の腕を掴み）捜査令状を見せてください！
田所　あーっ。公務執行妨害！
白鳥　不味い！
田所　（白鳥に視線を移し）うん？
白鳥　（酒を啜り）酒が不味い！
田所　爺さん。不味い酒は身体に毒だよ。
白鳥　元気そうだな。田所上等兵…。
田所　な、何だと？　こ、これは…。

と、後退り直立不動で敬礼する。

田所　白鳥中隊長殿でありましたか！
白鳥　南方の前線で別れて以来だ…。
田所　はい。何とか生きて戻りました！

一同、意外な展開に顔を見合わす。

白鳥　民夫、パン生地の醗酵が良かろう？
民夫　はあ？
白鳥　パン生地を工場に運んでくれ。
民夫　でも工場長…。
白鳥　ガスが抜けんようにソーっとな。
民夫　あ、はーい。倉科さん…。

民夫と倉科、井上が麻袋ごと抱える。
冴子と風子、朱実の先導で通路へ去る。

田所　いやはや、中隊長殿の根城とは驚きました。
白鳥　（カップ酒を進め）再会を祝い一杯どうだ？
田所　いまは公務中です。それともご命令でありましょうか？
白鳥　最早、命令する立場にはない。
倉科　（戻ってきて）仕込みの準備出来ました。
白鳥　ご苦労。折角の再会で残念だが、パン作りには一番大事な時間でな。今日の所は失敬するよ…。

と、田所の前にコップ酒を置いて去る。

田所　こんな所に雲隠れしていたとはなあ…。
倉科　田所さん。あんたは嘘つきだ！
田所　ああ。俺も予想外の展開でな…。
倉科　誰も傷つけないって言ったじゃないか！
田所　中隊長からの祝い酒だ。飲んで落ち着けや…。
倉科　この責任はどうするんだよー。
田所　ああ。穴埋めは必ずするよ…。
倉科　冗談じゃねぇよ。もう二度と俺の前に現れないでくれ！
田所　歌舞伎町で女を抱いてこいや…。
倉科　うるせぇ。早く帰れよ！

田所、無造作に床に紙幣を撒いて去る。

倉科　うぅーっ、どうすりゃ良いんだよー。（と、床をのたうち回り）糞ったれ糞ったれーっ！（と、床の紙幣を掻き集め）こんなもの、こんなものこんなものーーーっ！

と、紙幣を握り締めて玄関から出て行く。

朱実　お兄ちゃん…。

と、通路から朱実と民夫が現れる。

暗転。

―七場―　１９６３年　春　那須別荘

夕焼けに映える別荘のサンデッキ。
遠く近く、カッコウの啼く声。
テーブルポータブルラジオから、『ブーベの恋人』の音楽。
その脇に洋酒のボトルが転がり、上半身裸の真一がロッキングチェアーでグラスを傾けている。
下手から、白い鍔広帽子に水色のワンピース、白いパンプスを履き旅行鞄を抱えた風子が現れる。

風子　（暫く真一を眺め）素敵な別荘ですね。
真一　風ちゃん。どうして？　（と、シャツを羽織る）こんな姿を見せたくなかったな…。
風子　はい。ご所望の小説ですよ！

と、空中に包みを放る。
真一、慌てて包みをキャッチする。

真一　何だよ急に！
風子　（笑って）いい反応ですね。
真一　やられたなあ。郵送で良かったのに…。
風子　田舎に帰る途中なんです。
真一　田舎で何かあったの？
風子　ブティック店に職が決まったんです。
真一　そうか。それはおめでとう。
風子　その報告をかねての里帰りです。
真一　初心を貫いて田舎に凱旋かあ…。風ちゃんが居なくなると、工場も寂しくなるなあ。
風子　民夫が労働組合を結成しましたよ。
真一　へえー。労働組合を結成したか…。
風子　戻ったら初の団体交渉。民夫が会社にガツーンと、交渉する張り切っていますよ。
真一　軍国主義者との交渉は見ものだな…。
風子　社長、入院しましたよ。

真一　えっ。親父も年貢の納め時かな…。
風子　何で帰らないんです？　みんな真一さんを待っていますよ。
真一　まだ。答が見つからなくてね…。
風子　山に籠もって答が見つかるんですか？　今、会社は職人たちの退職と、大手パンメーカーの小売店進出で、窮地に立たされて居るんですよ。
真一　俺が戻った所で何の役にも立たんよ。
風子　本当に会社を継がないんですか？
真一　会社経営には何の関心もないよ…。
風子　職業活動家になるんですか？
真一　その道も八方塞りさ…。
風子　「唄を忘れたカナリア」ですね…。

風子、『唄を忘れカナリア』を歌う。

真一　俺は山に捨てられたカナリアか…。
風子　誰に捨てられたんですか？
真一　俺は…自分で自分を捨てたんだ…。
風子　真一さんらしくないですね。多くの若者を巻き込んで、自分だけ逃げるなんて卑怯ですよ。
真一　だから苦しいんだよ…。
風子　あの日。何で私を庇ったんです？
真一　咄嗟のことで覚えてないよ…。
風子　私も分からなかった。なぜ真一さんの所に走ったのか…。
真一　あの時、いろいろな音が聞えたんだ…。
風子　えっ。どんな音ですか？
真一　機動隊の靴と盾の軋む音、サイレンと怒号…。俺たちはあっという間に蹂躙されて、女子大生が踏付けられていた。俺は何も出来ずに呆然と見ていた…。そのとき俺を呼ぶ風ちゃんの声が聞こえて、警棒を振り上げた警官から、必死に逃げる風ゃんがいた。俺は夢中で警官に突進した。同時に足の骨が砕ける音がして倒れた。記憶が薄れる中で、風ちゃんの心臓の音が聞こえた…。何であそこに風ちゃんが居たんだ？
風子　私には分かります。何で真一さんの所に走ったのか…。真一さんが好きだから走ったんです…。
真一　えっ。風ちゃんが俺を？
風子　でも今は後悔してるんです。私のせいで大怪我をして…。だから真一さんには、あの頃に戻って欲しいんです。
真一　あの時の俺は、何処にもいないよ…。
風子　真一さんは、いまも真一さんです！
真一　それは違うよ。生半可に齧ったマルクス主義を、自分の思想と勘違いした愚か者だよ。マッサラな風ちゃんまで巻き込んで…だから。ごめん！（と、頭を下げる）
風子　いいんです。気持ちを伝えたかっただけですから…。

と、『歌を忘れたカナリア』を歌う。
真一、耐えきれず風子を抱きしめる。
茜色の夕焼けに二つの影が一つになる。
暗転。

―八場―　１９６４年　夏

作業台の上に薬缶とコップがある。
テーブルで絵を描く民夫。
通路から書類を持った冴子が現れる。

冴子　根を詰めてるけど、団体交渉の準備はいいの？
民夫　えっ。もうそんな時間ですか？
冴子　（絵を覗き）ふーん。西条八十の『宵待草』か…。

冴子、『宵待草』を口ずさんで室内を歩く。

民夫　い、いいー。そこですトップして！
冴子　えーっ。何よーっ！
民夫　そのまま動かないで。モデルお願いします！
冴子　ちょ、ちょっとー。この格好じゃ無理よー。

冴子　ぎこちなくポーズを決める。
民夫、必死にスケッチに集中する。

冴子　風ちゃん。今日戻ってくるのよね？
民夫　初めての団体交渉に書記長不在じゃ、締まりませんからね。
冴子　偉いなあ。錦を飾って故郷に凱旋…。
民夫　俺と違って一直線でしたからね…。
冴子　風ちゃん居なくなると、此処も寂しくなるわねぇ。
民夫　風子には、最初で最後の団体交渉。今日はガツーンと交渉させて貰いますよ。
冴子　その委員長が、のんびり絵描いてていいの？
民夫　ですから、交渉はお手柔らかに願います。
冴子　そうはいかないわ。経営者側の人間として、厳しく対応させて貰うわよ。（と、力を込めて体制を崩す）
民夫　あーっ。動かないで！
冴子　あっ、ごめーん。（と、ポーズを戻す）風ちゃん。真一さんの療養先に寄ったのよね？
民夫　読みたい本があるって。紀伊国屋で買って届けさせました。
冴子　那須あたりの本屋じゃ、哲学の本ないだろうからね…。
民夫　それが三島由紀夫の、『美徳のよろめき』なんです。
冴子　えーっ。あの不倫小説？　うちの若旦那も迷走しているわね。そんな所に風ちゃんを一人で行かせて心配ないの？
民夫　それはないですよ。真一さんが風子なんかと…。
倉科　あー。あちーい。夏の窯番は堪らーん！

と、通路からパンツ一丁の倉科が現れて、薬缶の注ぎ口から直に、喉を鳴らして水を飲む。

倉科　ああ、体中の水分が搾られて、スルメになっちゃうよ…。
民夫　冬の窯番は快適ですよー。
倉科　この野郎、皮肉を言いやがって。一銭にもならねぇ挿絵なん

か止めちまいな。
民夫　もう。放っといてください。
倉科　何だ。先輩にその言い方は？
民夫　俺には嫌みにしか聞こえません。
倉科　にしても冴子さんがモデルとは、どういう風の吹き回し？
冴子　風ちゃんのピンチヒッターよ。
倉科　ふーん。ピンチヒッターねぇ。
冴子　何よその歯に物が挟まった言い方は？
倉科　結構、悪くない雰囲気だけどねぇ。
冴子　倉科君。その格好はレディの前で失礼よ。
倉科　またまた、冴子さん。（と、腕に力瘤を作り）この肉体美に痺れてる女が、大勢いるんですからね。
冴子　へー。洗濯板の肋に痺れる物好きな、女性がいるんだあ。
倉科　骨だけ愛して欲しいのよってね。ゴホゴホゴホ…。
冴子　ほらー。夏の風邪を拗らせると怖いわよ。
倉科　へへーい。（と、通路でズボンを履く）
冴子　薬を出しておくから、帰りに診療所よりなさい。
倉科　俺の風邪は金欠病。薬じゃ治りませんよ。

と、ベルト締めながらスケッチを覗く。

倉科　おっ。案外美人に描けてるじゃねぇか。
民夫　モデルがいいと、気合入りますからね。
冴子　（絵を覗き）えーっ。私ってこんなアンパン顔じゃないわよ。
倉科　どう見てもそっくりだけど？
冴子　もうモデルはお終り。団体交渉の準備と…。

と、膨れっ面で事務室に去る冴子。
そこへ、玄関から風子が現れる。
奇抜なファッションに、サングラスをかけている。

風子　ただいまあー。
倉科　おっ。どちらさんですか？
風子　（サングラスを外し）どう。私の新作ファッション？
民夫　何だ風子か。脅かすなよ？
倉科　俺、女優さんかと思ったぜ！
風子　（小窓へ走り）冴子さん。ただいまー。
冴子の声　お帰り…。あらー、素敵なファッション！
風子　本当ですかー？
冴子の声　特にボディラインがいい…。
風子　わあ、冴子さんに褒められて嬉しーい。
白鳥　（通路から現れ）おっ。戻ってきたな。冴子くーん。コーヒーを入れてくれんかね。
冴子の声　お酒じゃなくていいんですか？
白鳥　初の団体交渉だ。酔って対応する分けにいくまい。
風子　長い休暇を頂いて済みませんでした。
白鳥　親御さんが喜んだろう？
風子　はい。母が近所中に吹聴して大変でした。
白鳥　娘が志を遂げての凱旋だ。何よりの親孝行さ。（と、風子を眺めて）これなら銀座でも通用するな。

風子　ありがとうございます。
白鳥　此処じゃ掃き溜めに鶴だ。早く着替えてこい。
風子　はーい。（と、通路へ去る）
民夫　風子のヤツ大人なったなあ。
倉科　すっかり垢抜けてよ。俺、ゾクッときたぜ…。
白鳥　目的を遂げた者の自信だな。
倉科　あの「あんぽ柿」がよ。女は怖えーな…。
冴子　お中元に頂いた、インスタントです…。

と、事務室から現れてコーヒーを配る。

民夫　（一口啜り）おっ。案外イケますね？
倉科　何だこりゃ。「シャンゼリゼ」とは月とスポンだな。
民夫　聖子ちゃんとは比べられませんよ。
白鳥　うむ。ハルピンのカフェが懐かしい…。
倉科　えっ。戦場にも喫茶店あるんですか？
白鳥　戦場も街は平穏なものさ。喫茶店も酒場もある…。窓の外はガス燈に霧に煙り、李香蘭の『蘇州夜曲』が流れて、若い兵士は遠い故国の恋人に、想いを馳せて涙をしてたな…。
倉科　殺伐とした戦場で一杯のコーヒー。男のロマンですね。
白鳥　所詮戦争は人殺しだ。憧れるものではないよ。
冴子　工場長も東京に、恋人いたんでしょう？
白鳥　うーむ。幼馴染が神楽坂にな…。
冴子　その女性の人はいま？
白鳥　東京大空襲で行方知れずだ…。（と、コーヒーを啜り）それにしても不味いコーヒーだな。
冴子　ドリップに入れ替えましょうか？
白鳥　いいさ、これも一つの現実だ。民夫、雑誌社に持ち込んだイラストはどうなった？
民夫　編集長が「これからは劇画だと」とこれを…。

と、白鳥と倉科に雑誌を手渡す。

倉科　『ガロ』…。何だこりゃあ？
白鳥　うむ。変わったネーミンだな？
冴子　あら、『カムイ伝』が載ってるコミックね？
民夫　冴子さん知っているんですか？
冴子　医学生が置いていくから、大人も子供も夢中よ。
倉科　（ページを開き）凄げぇ。腕が斬り飛ばされてる！
民夫　小説と違って新しい作法です…。
冴子　じゃあ。挿絵の将来はどうなるの？
民夫　編集長は劇画の台頭で、小説離れが進むから、「出版の主流がコミック誌になる」と…。挿絵の将来は悲観的ですね…。
白鳥　それなら劇画に転向すればよかろう。
民夫　俺は物語を作れないですから…。
白鳥　此処らで挿絵を諦めて、パン職人に専念するかい？
民夫　その道もありですかねぇ…。
冴子　諦めちゃ駄目よ。挿絵を止めたら民夫君じゃないわよ。
民夫　と言っても、時代の流れですからねぇ…。
冴子　民夫君の駄目ななのは、その中途半端な考えよ！　風ちゃん

を見習いなさい。とことん描いて描いて鼻血出して、ぶっ倒れるまで描きまくることよ！

倉科　冴子さん。嫌に気合い入ってますね？

白鳥　その勢いで団体交渉を頼むよ。

冴子　ははは、民夫君の優柔不断に力んじゃった！

と、照れ隠しに民夫と倉科をド突く。

民夫　痛てーっ。

倉科　何で俺までトバッチリなんだよ？

風子　はーい。お待たせ致しました！

と、「団結」の鉢巻き締めた風子が現れる。

倉科　おっ。こっちも気合い入ってるねぇ。

風子　最初で最後の大仕事ですからね…。

民夫と倉科に鉢巻きを配る。

鉢巻き締めて白鳥と冴子の対面に座る三人。

風子　社長は出席しないんですか？

冴子　まだ退院の許可が出ないのよ。

風子　そんなに悪いんですか？

倉科　団体交渉から逃げてんじゃないの？

白鳥　交渉は儂が一任されておる。初めて貰おうかな。

民夫　あー、はい。（と、ガチガチに緊張して）そ、それでは…。

と、立ち上がり椅子を後ろに倒す。

倉科　おいおい。大丈夫かー？

民夫　（冴子に）どうしましょうか？

冴子　ちょっとー。交渉を求てるのは労働組合よ。

民夫　はあ。そうですが…。痛たたーっ！（と、腹を押さえる）

風子　委員長。しっかりしてよ！

民夫　ちょ、ちょっとタンマ！

風子　民夫は肝心な時に腹病みなんだから。

民夫　悪い。風子進めてくれ…。

風子　仕方ないわね。では団体交渉を始めさせて頂きます。まず最初に先日、労働組合が提出しました、要望事項について山川委員長から説明をお願いします。

民夫　えっ。風子が読んでよ…。

風子　文章を読み上げるだけでしょ。

民夫　（下っ腹を押さえて）えー、労働組合は結成したばかりでありましてぇ。お手柔らかにお願いしま～す。

風子　（呆れて）労働組合の要望事項よ。要望事項！

民夫　うう～っ、痛たたっ…。

倉科　（民夫の背中を叩き）しっかりしろよ。委員長！

民夫　あ、熱つっ！（と、立ち上がり）

プーッ！　と音が漏れて尻を押さえる。

倉科　今の…。出たなあ？
民夫　で、出たあ！
倉科　（鼻を摘み）ううっ、臭せーっ。
白鳥　これは堪らん。毒ガス弾炸裂だ。総員退避せよ！

ガタガタっと席を離れて散る。
窓を開けスケッチブックで煽る冴子。
倉科が民夫の腰を蹴る。

倉科　早くトイレ行ってこい！
民夫　さ、触らないでーっ！
風子　暫時、休憩としまーす。

民夫、尻を萎めて小刻みに通路へ去る。

倉科　ははは、怒ると可愛いとこあるな。
冴子　委員長が交渉の初っ端からこれじゃ、風ちゃんがいなくなったら、組合の先行きが心配ねぇ…。（と、席に戻る）
倉科　風ちゃん。真一の様子はどうだった？
白鳥　ほう。真一の所に寄ったのか？
風子　はい。本を頼まれて届けてきました…。
白鳥　少しは元気になったのか？
風子　足は完治してる様子でした…。
冴子　心の病の後遺症は時間かかるからね。
白鳥　ここを悩み抜けんようでは、この先使い物もならんからな。
　完治を待つしかなかろう。
民夫　（戻ってきて）大変、お待たせしましたあ。
倉科　おっ。嫌に早えーな。
民夫　超特急で一気に出ましたーっ！
白鳥　団体交渉も超特急で願いたいねぇー。
倉科　ははは、工場長…。（と、腹を抱えて笑う）
風子　はい。では委員長から要望事項を…。
民夫　どうも失礼しました。改めて交渉を始めさせて頂きます。先日書面で申し入れました「大幅賃上げ」と「日曜、祝日の完全休暇」について、会社側の回答をお願いします。
白鳥　冴子くん。説明してやってやくれ。
冴子　はい。えー、結論から言うと、今の会社の状況では、労働組合から出されている要望に、応える事は出来ません…。
民夫　えっ、ゼロ回答ってことですか？
冴子　理由は東京オリンピック景気で、職人が高い賃金を求めて、転職して人手不足が慢性化し、得意先に注文通り、納品できない状態です。いま、「大幅賃上げ」と「日曜、祝日の完全休暇」の実施は無理です…。
民夫　その過重労働が祟って、体調崩してる者もいるんですよ。労働環境を改善してこそ、雇用も安定するじゃないですか？
倉科　その通りだ。これ以上過重労が続いたら、もっと退職者が増えるだけだよ。
冴子　それは組合の言う通りだけど…。小売店から注文通り納品できなければ、取引を他のメーカーに、変えると言って来てる

の。まさに売り上げの減少で、会社存続の危機なのよ。だから組合の要望は危機を回避するまで待って欲しいの…。
民夫　それは会社の責任であって、労働者の責任でないでしょう！
冴子　それだけなら打つ手あるけど、今大手の製パンメーカーが、オートメーションで作った、パンの卸値をダンピングして、大々的に小売店獲得の攻勢をかけてきているの。
風子　店にも販売拡張員が営業にきていたわ。
民夫　（倉科に）得意先にも動きあるんですか？
倉科　そう言えば、近頃よく鉢合わせするな…。
民夫　随分、遣り方がえげつないですね。
倉科　大手メーカーには、商道徳も仁義もねぇのさ。
民夫　そのオートメーションのパン。売れているんですか？
倉科　格安の卸し値でだからな、単価じゃ太刀打ちできねぇよ。なんだかんだ言って、確実に注文が減ってきてるよ…。
白鳥　作れば売れたパン業界も、自由競争時代と言うわけか…。機械で作ったパンと侮っていたが、大手メーカーが攻勢かけてくるからには、単価だけでなく製品に自信あるのだろう。このままでは我々、町の製パン業は生き残れない。手作りパンが踏み留まるか、白旗を挙げるかの瀬戸際だ…。
風子　工場長。時勢を語られても…。
白鳥　そこで相談だが。労働組合の力を貸してくれんか？
民夫　そんな。闇雲に力貸せと言われても…。
白鳥　会社が潰れては元も子もなかろう。大手メーカーに対抗するには、会社と社員が団結しない太刀打ちできない…。
民夫　それで、「大幅賃上げ」と「日曜祝・日の完全休暇」の保証はあるんですか？
冴子　実は工場長のアイディアでね。会社が存続できて組合の要望にも応えられる提案があるのよ。
民夫　えっ。どんなアイディアですか？
冴子　工場長、ご提案をお願いします。
白鳥　ああ、冴子君から話してくれ。
冴子　えっ、私からですかあ。えー、いまの現状を打開するには、客のニーズに合わせた新商品を開発して、新規に販売ルート開拓することが急務…。
倉科　これ以上集配地域を広げたら、回りきれませんよ。
冴子　それが逆の発想でね。集配地域を一局集中型にして、効率と利益を測る一挙両得の作戦なのよ…。
倉科　一挙両得の一局集中型の作戦って？
冴子　この近くには神宮球場とラグビー場。慶応、早稲田、上智大学など集中しているでしょ。そこの売店にパンを卸すのと、「風月パン」の直売店を出すのよ。
倉科　うーん。そう出来れば遠い小売店に、配達回収して回るより、一カ所で大量に捌けて効率いいな…。
冴子　でね。既に工場長が神宮球場と、秩父宮ラグビー場の売店に契約を結んで、大妻女子高校と大学の食堂には、直売店を出すことが決めてあるのよ…。
倉科　えーっ。流石は工場長、やること早えー。
風子　そうなると、無駄な返品も減るわね…。
民夫　しかし、この人員不足で出来ますか？
白鳥　当然、今のままでは無理だ。銀行から借り入れ起こして、求

人広告で募集をかける…。
民夫　えっ。新聞で職人を募集するんですか？
白鳥　職安からくるのは失業保険目的の、ヤクザな渡り職人が多くて定着率が悪い。繋ぎ止めるには賃金だろう？
倉科　そうなると売店の売り子ですね…。
冴子　そこでね。倉科君に相談があるの。
倉科　えーっ。俺に相談って？
冴子　倉科君のお母さんから、日雇いのおばさんたちに、売店の売り子を頼んで貰えないかしら？
倉科　冴子さん。ヨイトマケの婆さんに、売店の売り子は無理だよ。
風子　面白いじゃない。井戸端会議で鍛えた話術と人望…。
倉科　確かに雨が降っても、仕事にあぶれる心配はねぇな…。いや、やっぱり駄目だ。あの婆さんたちは絶対に駄目だ！
風子　えーっ。何が駄目なんですか？
倉科　現金を見たら猫に鰹節だよ。売上金ちょろまかされるよ。
冴子　その管理は私に任せて！
倉科　鬼の冴子さんなら大丈夫か？
冴子　と言った理由で、新規事業が軌道に乗るまで、労働組合の協力が欲しいのよ…。
倉科　軌道に乗ったら要望を実行しますね？
白鳥　社員あっての会社だ。その暁には全面的に労働組合の要望には応じる。この方向で納てくれんか？
民夫　書記長、倉科さん。今の回答でどうですか？
倉科　俺は工場長の案でオッケーだ…。
風子　私もＯＫです。
民夫　工場長。その線で宜しくお願いします！
白鳥　少し喋り過ぎた。冴子君、後の話は頼むよ…。

と、爪楊枝を鳴らして通路へ去る。
窓の外が夕焼けに染まる。
夕陽を背に陰を延ばして真一が現れる。

真一　活発な議論が飛びかっていたね。
民夫　あーっ。真一さん！
冴子　山篭りから戻ったのね！
倉科　幽霊じゃねーだろうな？
風子　（戸惑い）……。
冴子　もう足はスッカリいいの？
真一　はい。この通り…。

と、しっかりと四股を踏んでみせる。

真一　団体交渉中だろう。遠慮しないで続けて…。
倉科　おっ、社長の代理で交渉に参戦か？
民夫　真一さん。労働組合の立場ですよね？
真一　いや、会社を継ぐことに決めたよ。
冴子　えっ。会社を継ぐ決心したのね！
真一　病院に寄って俺のやり方でやると、親父に宣言してきた。
民夫　えっ。真一さんのやり方って？
真一　今の職人頼みのやり方じゃ、商品の安定供給に不安だ。最新

技術を導入して、大量生産に切り替える…。
民夫　今いる職人たちはどうなるんです？
真一　機械化に馴染めない者は、退職して貰う事になるな。
民夫　えーっ。大手メーカーと、同じじゃないですか？
真一　同じじゃない。大手メーカーの上をいくんだよ！
倉科　けっ。マルクス主義者が資本家への大転換。相変わらずへ理屈とこじ付けは天下一品だな。
冴子　真一さん。会社は玩具じゃないの。それに団体交渉の場で話す内容じゃないわよ！
真一　勿論。中長期の戦略で進めますよ。
冴子　会社の方針を決めるのは、工場長と相談してからよ。委員長、今日の交渉は此処までにしよう？
民夫　はい。有難うございました…。
冴子　真一さん！　（と、通路へ去る）
真一　民夫。後で話があるんだ…。
民夫　えっ。組合のことですか？
真一　ま、急がないから後でな…。（と、通路へ去る）
民夫　可笑しな団体交渉なりましたね…。
倉科　初めての交渉にしては上出来さ。
民夫　それにしても、真一さんの変貌は驚きですね？
倉科　彼奴のマルクス主義は、あの程度だってことさ。あーあ、これで真一の社長が決まりかー。
民夫　相談って何だろう。風子は何か聞いてるか？
風子　さあ。私は何も…。
民夫　何だか、怖いなあ…。

と、民夫と倉科が通路へ去る。
風子、室内を歩き回り、平手で作業台を叩く。
暗転。

―九場―　１９６３年　夏

朱実がラジオから流れる、『グットタイミング』に合わせて、半紙に鉛筆を舐め舐め書きものをして、廻りの床に丸めた半紙が散らばっている。
玄関から田所が現れる。
床の丸めた紙を拾い朱実の後ろへ回る。

田所　熱心に書いてるねーっ！
朱実　うわーっ。（と、椅子から転が）
田所　ははは、すまんすまん。
朱実　田所のおじさんかー。驚かさないでよー。
田所　（紙を広げて）何を書いてるんだい？
朱実　あーっ。返してよ！
田所　いいじゃないか。しかし、平仮名ばっかりだな…。
朱実　だって学校行ってないもん。
田所　定時制に行ったらどうだ？
朱実　へー。おじさん心配してくれんの？

田所　ああ、お前たち兄妹の事は心配してるよ。
朱実　嘘付け！
田所　俺にも朱実と同じ歳ごろの娘がいてな…。
朱実　へぇー。おじさんも娘いるんだー。
田所　これが、親不孝な娘でな…。
朱実　ふーん。刑事の娘なのに？
田所　東京大空襲で焼け死んだよ…。
朱実　えっ。嘘だろーっ！
田所　嘘ならどんなに嬉しいか。（と、煙草に火を付け）朱実、頼むから身体売るのは止めろ…。
朱実　あたし、そんな事してないよ！
田所　隠しても駄目だ。夕べのガサ入れでお前の仲間から、スッカリと証拠が挙がってるんだよ。
朱実　（両手を出し）ふん。じゃあしょっぴきなよ！
田所　お前のに輪っぱかけても手柄にならん。
朱実　じゃあ、どうすんのさ。
田所　今回は勘弁するが、二度とやらないって約束しろ！
朱実　（神妙な顔で）指切りゲンマン。約束しまーす。

と、田所と朱実が指切りゲンマンする。
そこへ、通路から倉科が現れる。

田所　よっ。お邪魔してるよー。
倉科　朱実。こんな所で何してんだ？
朱実　小説を書いてんの…。
倉科　そんなの時間の無駄と言ったろう。
朱実　店にくる贔屓の小説家先生が、私の書く世界が面白いから、書き続けろってさ…。
倉科　ケッ、馬鹿野郎。どうせお前のケツが目的の、ど助べ親父のお世辞にきまってるよ。
朱実　ギョロ目で鱈子唇だけど、優しい小父さんだよ。
倉科　分かったから、やるなら家でやれよ…。
朱実　だって。家狭いんだもーん！
倉科　此処は仕事場だ。邪魔だから帰れっ！
朱実　もう。兄ちゃんは、邪魔者扱いなんだからー。

と、散らかして床の紙屑を拾う。

朱実　じゃあおじさん。またねー。
田所　ああ、約束を守れよ。
朱実　分かってるよーだ。（と、玄関から出て行く）
倉科　朱実と何の約束なんです？
田所　なーに。他愛ねぇ小さいことさ…。

田所、マッチで煙草に火を点ける。
雷鳴が轟き窓に青い閃光が走る。
外は雨が降り出した様子。

田所　例の件をやる気になったのかな？
倉科　女が病気になってね。金が入り用なんですよ。

田所　ふーん。例の歌舞伎町の女か…。
倉科　女が理由じゃ拙いですか？
田所　理由はどうでも大歓迎だよ。
倉科　何で工場長の日記帳なんですか？
田所　欽次、余計な詮索しねぇのが鉄則だぜ。
倉科　工場長は恩人ですからね。理由を知っておきたいんです。
田所　中隊長とは、人に言えない昔話があるんだよ…。
倉科　戦後のドサクサに、軍事物資を隠匿して、パン工場を興したって噂の件ですか？
田所　ふーん。知ってるじゃねぇか…。（と、煙草を灰皿に捻る）
倉科　工場長。逮捕されるんですか？
田所　そんなのはとっくに時効さ。俺と中隊長の個人的問題よ…。
倉科　それを聞いて安心しましたよ。それでその日記帳を手に入れたら、幾らで買ってくれるんです？
田所　報酬はブツが手に入ってからだな。
倉科　冗談じゃない。前金でなきゃ動けませんよ！
田所　欽次、俺を強請っているのか？
倉科　まさか。底が知れない工場長から、クビを覚悟で危ない橋を渡るんだ。空手形じゃ勇気が出ませんよ。
田所　ふん。随分と成長したじゃねぇか。
倉科　田所さんにタップリ学びましたからね。（と、片手を示し）これでどうです？
田所　安月給から五万は痛いな。ま、最大限に努力するよ…。（と、二万円を渡し）残りは手帳と交換でいいな？
倉科　（札を受け取り）当座の支払いできますから…。
民夫の声　真一さん。待ってくださいよ！
真一の声　忙しいんだ。話は後にしてくれないか！
民夫　だって約束が違いますよ…。

と、通路から民夫と真一が現れる。

真一　おっ。何で田所刑事なんだ？
田所　やあ。若社長に組合の委員長さん。
真一　国家権力がパン工場に何の用だ？
田所　警邏の一貫でね。足の傷はもういいのかい？
真一　見舞いにしては遅い挨拶ですね。
田所　今、欽次君にも嫌味を言われてたところさ。
倉科　（田所に）用が済んだら仕事に戻ったらどうです？
田所　ああ、邪魔したね。持つべきは友だちだねぇ…。

田所、何の悪びれもなく玄関へ去る。

真一　欽次、田所とどういう付き合いだ？
倉科　ガキのころからの腐れ縁というやつよ。
民夫　職場に権力を入れるのは拙いですよ！
倉科　（通路に向い）もう、現れねぇから安心しな。
民夫　待ってくださいよ。
倉科　何だ。面倒な話は聞かないぞ。
民夫　真一さんが、人員整理すると言うんです！
倉科　ふん。いよいよ合理化の断行かい？

真一　機械化で大量生産体制が、軌道に乗ったからな。パンを作れば売れた時代が終わり、食生活の多様化が進んで、新しい具材のパンが求められる時代だ…。
民夫　それと人員整理がどう関係あるんです？
真一　新しい具をサンドする作業は、賃金が安い主婦のアルバイトで十分。賃金が高い職人を抱えていちゃ、設備投資した借金が返せないんだよ。
民夫　冗談じゃない。そんな一方的な会社の都合で、労働者の生活を奪う合理化を、労働組合は絶対認めませんよ！
真一　おーお、立派立派。遣り手社長と労働組合の委員長ぶり。
民夫　倉科さん。茶化さないで何とか言ってください！
倉科　民夫。真一はもう仲間じゃねーんだよ。労働者を搾取する経営者になったんだ。真一の好きにやらせるしかねぇよ。
民夫　惚けたこと言わないでください。そんな横暴を許したら労働者は、みんな路頭に迷う事になりますよ！
倉科　だから、正面から闘うしかねぇだろう。
真一　労働組合が何と言おうと、人員整理は断行するよ。
民夫　強行するならストライキで、対応するしかありませんね！
真一　ここまできたら後には引けない。受けて立ってやるさ！
倉科　どっちに軍配が上るか楽しみだな…。
真一　一番に騒ぎだすお前が、斜に構えてどうしたんだ？
倉科　ふん。長く居過ぎちまったよ。これは人員整理に先立って、俺から若社長にご祝儀だ…。

と、真一の前に辞表を叩きつける。

真一　欽次、何お真似だ！
民夫　倉科さん。待ってくださいよ！
倉科　前から言ってるだろ。真一が社長になったら辞めるって！

と、倉科が玄関から出ていく。
民夫と真一、思わず顔を見合わす。
玄関から厳しい顔の朱実が現れる。
暗転。

―十場―　１９６４年　夏

薄暗い室内。
通路に民夫と朱実が佇んでいる。
真一が玄関に背を向けて座っている。
玄関から、様子を伺いながら田所が現れる。

田所　例の手帳が手に入ったのかい？
真一　（椅子を回して田所に向き合う）
田所　おっ、これは。若社長でしたか？
真一　残念でしたね。欽次じゃなくて。
田所　この芝居じみた出迎えは何の悪戯だい？
真一　田所さん。欲しいのはこれでしょう？

と、黒革の日記帳を台に置く。

真一　これで欽次から手を引いてください！
田所　随分、ダイレクトなんだねぇ。
真一　無駄が嫌いな性格ですからね。
田所　欽次が何をしたか、ご存知なのかい？
真一　あなたに答える義務はないでしょう。
田所　ふーん。分っていてクビにしないんだ。
真一　は、会社に辞表出しましたよ。
田所　ふーん。欽次が辞表をねぇ？
真一　（日記帳を示し）約束ですよ。
田所　それを頂ければ縁はきれますよ。
倉科　待てよ。勝手な真似すんじゃねぇよ！

と、玄関から物凄い形相の倉科が現れる。

真一　話は済んだ。お前は引っ込んでいろ。
倉科　うるせぇ。手めぇこそ出しゃばるなよ！
田所　欽次。もうお前はご用済みだよ。
倉科　田所さん。約束を反故にするのかい？
朱実　お兄ちゃーん！
民夫　いい加減に目を覚ましてください！

と、通路から民夫と朱実が現れる。

倉科　な、何でお前らが出て来るんだ？
田所　はははは、欽次。とんだ茶番劇だが、本官はこれで失礼させて貰うよ。（と、玄関へ向かう）
倉科　畜生、利用するだけ利用しやがって…。
田所　今ごろ気がついたか。お前の脳みそは鉄屑ドロのときから、ちーっとも成長していねぇな。
白鳥　田所。お前の望むものは、何も書いちゃいないよ。

と、通路から白鳥と冴子が現れる。

倉科　こ、工場長ーっ…。
田所　ふん。本官も焼きが回ったかな？
倉科　（壁のバールを掴み）田所さん。このまま帰しやしませんよ！
田所　欽次。何のまねだ？　本官とやろうってのか！
倉科　ああ、やってやるよ。俺の人生を滅茶苦茶にしやがった。今までの借りを熨斗付けて返してやるよ！
田所　欽次。警察官への傷害は、一発でブタ箱入りだよ。
倉科　上等だ。ブタ箱だろうが下駄箱だろうが、付合ってやるぜ！
朱実　兄ちゃん。止めてよー。
冴子　倉科君。暴力を振るったら負けよ！
田所　中隊長殿。部下が怪我してもいいんですか？
白鳥　（椅子に腰を下ろす）民主警察がナンボのものか、お手並みを拝見させて貰うよ。
冴子　工場長。止めてくださいよ！

倉科　冴子さん。男のケジメだよ男のケジメ！
民夫　（倉科のバールを掴み）暴力じゃ何も解決しませんよ！
倉科　あっ、何をする。放しやがれ！

と、民夫と倉科が激しく揉み合になる。

田所　欽次。やるのかやらないのか！
倉科　（荒い息で）や、やってやるよ！
真一　（倉科の腰に抱きつき）欽次。止めろ止めるんだ！
朱実　兄ちゃん。止めて止めてーっ！
田所　朱実、怪我するから離れていろ！
倉科　糞ったれ。どいつもこいつも邪魔ばしやがって、退きがれってぇんだよーっ。うおっー、うおおおおおーーーっ！

と、民夫と真一を曳きずり田所に迫る。

倉科　うっ。ゴホゴホ、ゴホホホホーーーッ！

民夫の胸に血吐いて赤く染める。

民夫　うわわーーっ。何なんだーっ！
朱実　お兄ちゃーん？
田所　き、欽次。どうしたっ！
倉科　ゴホゴホーッ！（と、尚も血を吐く）
白鳥　ん。胸をやられているな…。
倉科　おかしいなあ。血なんか出たことねーのに、ゴホゴホッー。
冴子　ああ、見抜けない私は、看護婦失格だわ！
白鳥　真一、救急車を呼べ！
真一　あ、はい！
田所　（受話器を奪い）貸せよ！
真一　あっ。何するんだ！
田所　（ダイヤルを回して）ああ、田所だ。急病人が出てね。悪いがパトカーを回してくれないか。救急車じゃ拙いんだ。事情は後で話すから頼むよ…分かってる分かってる…。場所は文化放送の交差点を左に入った、風月パンの工場だ…サイレンは鳴らさなくていい…。
真一　病人を拘束するのか！
田所　（受話器を置き）パン工場で結核患者はまずいだろう？　欽次は警察病院に連れて行く。
倉科　俺はパトカーなんか乗らねえよ！
白鳥　欽次、乗せてもらうんだ。
全員　えーっ。工場長？
白鳥　真一。工場の作業を中止させろ！
真一　あ、はい！（工場へ去る）
白鳥　冴子君。朝一番に保健所に届けてくれ…。
冴子　あ、はい！　（と、事務所に消える）
白鳥　（民夫と朱実に）欽次に外の空気を吸わせてやれ。
民夫　はい、俺の肩に掴まって…。
朱実　お兄ちゃーん…。

民夫と朱実、倉科の身体を支えて外へ。

白鳥　田所。何時まで荒い仕事を続けるんだね？

田所　何時までとおっしゃいますと？

白鳥　静かな仕事に就いたらどうだ。

田所　よしてくださいよ。今さら…。

白鳥　今さらだからよ。どんなに抗ったって、我々が仕出かした罪は消えやせん…。

田所　鬼の中隊長殿が、反省の弁ですか？

白鳥　わしもお前も病んでいるんだよ。

田所　病まないわけないでしょう。罪のない者の試し切りに試し突き…その上妊婦まで…。

白鳥　何時まで昔を引きずっても、死んだ者の供養にはならん…。

田所　冗談じゃない。それを指揮したのは、中隊長じゃないか。そのあなたがどの面下げて、人の喰うパンを作って、平穏でいられるんです！

白鳥　平穏で居られると思うかね？

田所　鬼ですからね！

白鳥　それで、これが欲しいのか？

白鳥、田所に向って手帳を放る。

田所、手帳を白鳥に押し返す。

田所　語って頂けりゃ、用ありませんや。

白鳥　人間という生き物は弱いものさ。わしも仏にすがろうと四国八十八カ所、お遍路道を彷徨い歩いたよ…。

田所　そんな程度で心が鎮まらんでしょう？

白鳥　四国の海に沈む夕陽が奇麗でな。その夕陽の後の漆黒の闇は限りなく深く、地獄の底へ曳きずっていく…。

田所　そ、それは…。

白鳥　夜が明けて目覚めると、誰もいない砂浜の塹壕で、お前と焚き火を前にスコップで、焼いた肉を喰らってるんだよ…。

田所　うう〜っ。や、止めろ。その話は止めろ…。うっ、うおっ、うおお〜っ…。（と、ゲロを吐く）

白鳥　今も夜中は地獄でな。夢を呪う懺悔の毎日だよ…。

田所　うう〜っ。止めろ止めろ…その話は止めろ。止めてくれ止めてくれ、止めてくれよ〜っ！　（と、ゲロに塗れる）

長い沈黙の間。

田所、壁を伝って起き上がり鏡を覗く。

田所　うううーーっ。何て面なんだ…。

白鳥　田所。あの地獄を歩いてきた我々だからこそ、やるべきことがあるのじゃないかね？

田所　うう〜っ。その地獄の底で足掻き苦しんで…身動きできない者だっているんです〜っ。

白鳥　だからと言ってあの若者たちに、同じ地獄を歩ませたくはないだろう？　我々だって戦場で出会わなけりゃあ。別々の人生を歩いたろうさ。今からでも遅くはない。やり直しの道を一緒に探して見る気はないか？

田所　冗談じゃありませんよ。冗談じゃあ。どこにそんな道があると言うんです！　血に染まったこの手で…（と、手の平を見詰め）どうやって人が食うパンを、作れるっていうんです！　わたしゃわたしゃわたしゃ――――っ！

田所、狂ったように警棒で作業台を叩く。
パトカーのサイレンが近づいてくる。

田所　サイレン鳴らすなって、言ったんですがねぇ…。
白鳥　田所。この生き地獄は、一人じゃ背負いきれんぞ…。
田所　自分は痩せても枯れても、中隊長殿に鍛えられた、大日本帝国の軍人です。引き返す勇気はありませんです…。（と、直立不動で敬礼し）ああ、我々が歩んだ地獄か…。
白鳥　不憫な奴め…。

田所、呟やきドアに身体を打って去る。
白鳥、日記帳を作業台に叩きつけて去る。
窓に朧月が見える。
暗転。

―十一場―　１９６４年　秋

ガラス窓に閃光が奔る。

外は暴風雨に荒れている。
作業台にうっとりと頬づえの冴子。
民夫、その冴子をモデルにスケッチする。

民夫　倉科さんの病気どうですかね？
冴子　結核療養所だから心配ないわよ。
民夫　しかし、会社の休業は大変でしたね。
冴子　ピンチはチャンス。新しい体制作りに恵みの雨だったのよ。
民夫　合理化に強硬だった真一さんが、粘り強い組合との交渉で、職人たちの首切り撤回しましたからね…。
冴子　きゃーっ！

冴子の悲鳴と一緒にバリバリーッ！
と、窓に閃光が奔り暗闇になる。
外は激しい雨音。
長い闇の間。
チカチカと点滅して灯りが点く。
冴子が民夫にしっかり抱きつている。

民夫　あっ、冴子さん？
冴子　ゴキブリと雷はだめよーっ！

玄関のドアが開き激しい雨が吹き込む。
全身ずぶ濡れの風子が現れる。

冴子　（民夫を突き放し）風ちゃん！

民夫　風子。ち、違うんだ。突然落雷して…。

冴子　そう。ゴロゴロッーって！

風子　民夫。ごめん！（と、土下座する）

民夫　な、何だよ急に？

風子　わたし…赤ちゃんできたの…。

民夫　えっ。赤ちゃん？　誰のー。

真一　風ちゃん…。

と、玄関からずぶ濡れの真一現れる。

真一　お、俺の赤ちゃんだ…。

冴子　真一さん。一体どういうこと？

民夫　話があるって、このことかよーっ！

真一　ああ、民夫には悪いが俺は謝らないよ。

民夫　ははは、そうだったのか。全然知らなかったー。でもそれはないよーっ！　風子、何時からだ？

真一　那須に本を届けて貰った時だ…。

民夫　（真一の胸を掴み）真一さんに聞いてないよー。

真一　民夫、俺を殴れよ！

民夫　ううっ、畜生。畜生ーっ！

真一　いいから。俺を思いっきり殴れよ！

民夫　うううーっ。こんなもの。こんなものーっ！

と、真一を突き飛ばし、イーゼルのスケッチ帳を、床に叩きに叩きつけ滅茶苦茶に踏付ける。

冴子、民夫に近づきいきなり頬を張る。

冴子　男でしょ。いい加減にしなさいっ！

民夫　（頬を抑えて）ううーっ。

冴子　風子とは関係ないって、放っておいたのは民夫君でしょ！自分の無責任を人の所為に、しるんじゃないわよ。（と、身体を反転し）それと真一さん！

真一　あ、はい…。

冴子　いっつも先走った行動で、迷惑かけて反省しなさい！

と、真一の頬にも強かなビンタを飛ばす。

真一、頬を押さえて蹲る。

冴子　それから風ちゃん。妊婦がずぶ濡れでいいの。自分を責めるのはいいけど、お腹の赤ちゃんに何の罪もないのよ。（と、額にデコピン）早く部屋に行って着替えなさい！

風子　はい。ごめんなさい！　（と、通路へ去る）

冴子　（真一に）あなたも行きなさい！

真一　あ、ああ、風ちゃん…。（と、通路へ去る）

冴子　全く。どいつもこいつも無責任なんだから…。

冴子、スケッチ帳を拾って整える。

床の汚れにモップをかける。

民夫　あはははは。
冴子　何が可笑しいのよ！
民夫　ははは、田舎の母ちゃんみたいだ…。
冴子　よしてよ。私はまだピチピチの乙女よ。
民夫　う、うううーっ。（と、泣き出す）
冴子　笑ったり泣いたり忙しいわねぇ。
民夫　ううー。風子とはずっと一緒だったからー。
冴子　（優しく）思いっきり泣くといいわ。辛いだろうけど二人を認めてあげることね。それと女性には自分の気持ちを、シッカリと言葉で伝えないと駄目なのよ。
民夫　さ、冴子さん！
冴子　な、何よっ。急に迫らないでよ！
民夫　モデルモデル。モデルをお願いします！
冴子　えーっ、またモデルなのー。
民夫　無性に描きたくなりました！

と、スケッチ帳を開いて構える。
作業台に頬づえをつく冴子。
玄関から風呂敷包みを抱えた朱実が現れる。

冴子　あら、小説の原稿上がったの？
朱実　徹夜してやっと脱稿しました…。

と、包みを解くと部厚い原稿用紙が現れる。

窓から柔らかい朝陽が射し込んでくる。
暗転。

―十二場― １９６４年　十月

壁に「民夫君を送る会」の横断幕。
作業台に瓶ビールが冷やしてある。
民夫と風子が横断幕を眺める。
作業台に料理を並べる冴子。
真一がラジオをいじっている。
片隅にスポーツバッグがある。

民夫　俺と風子が来た時も、横断幕掛かってたな。
冴子　民夫君が鉄条網にオドオドしてね。
民夫　冴子さん。あれは風子ですよ。
風子　嘘よ。田舎に帰るって泣いてたじゃない。
民夫　倉科さんに、散々脅かされたからな…。
冴子　来た時はこんなだったのに、すっかり立派な大人になって。
民夫　冴子さんも、ピチピチの看護学生でしたよ。
冴子　私は、今もピチピチです！
民夫・真一　えーっ。（と、わざと驚く）
冴子　何よー。その驚きかたー？

と、冴子の態度に笑い弾ける。

風子　今日、倉科さん来るのよね？

真一　とっくに退院したのに、一度も顔も出さないでよ。
風子　あなたとの確執が原因じゃないの？
真一　彼奴が俺を敬遠する玉か？
冴子　さっき電話あったから現れるわよ。
倉科の声　アベベ、アベベーっ！
民夫　来ました来ましたよー。
倉科　よー。みんな元気してたかあ？

と、玄関から派手な背広の倉科が現れる。

真一　ったくー。久しぶりの挨拶がそれかよ。
倉科　アベベの人気は凄ぇーな。新宿通りと外苑東通りは、日の丸の旗があふれているぜ。
冴子　マラソンは唯でも観戦できるからね。
倉科　（真一に）今どの辺を走ってるんだ？

真一、ラジオのボリュウムを上げる。

ラジオの声　…アベベが先頭です。他の選手を大きく引き離して、独走体制に入った模様であります…。
真一　欽次。何でアベベの応援なんだ？
倉科　だってよ。エチオピアの原野を裸足で走って、世界の王者なったんだぜ。貧乏人の俺には神様よ…。
民夫　今回は裸足じゃないですけどね。
倉科　何だよ。それじゃアベベじゃないじゃん。
民夫　東京はシューズ履かないと危険ですからね。
真一　それでも、ブッチギリの独走だよ。
倉科　もう少しボリュームを…。

と、ラジオのダイヤルをいじる倉科。
「プツン！」と音声が途切れる。

倉科　あれっ。どうしたんだよー？
風子　このラジオは人を見るんですよ。
倉科　えーっ。何だよそれー？
風子　特に根性曲がりには意地悪ぇんです。
倉科　くーっ。風ちゃんも言うなあ。
風子　退いてください！　（と、平手でラジオを叩く）
ラジオの声　…依然としてアベベが先頭です。アベベの後には選手の姿は見あたりません…。
風子　（Ｖサインを出し）ねっ！
倉科　すげぇゴットハンド…。（と、風子のお腹を見て）あれー。まだ生まれてねぇのか？
真一　何年経ったと思ってんだ。二人目に決まってるだろ！
倉科　（風子のお腹に手を伸ばし）てことは真一が二人の父親か…。
真一　（倉科の手を払い）汚い手で触るんじゃないよ！
倉科　痛てぇな。何でだよ？
真一　お前の捻くれが赤ん坊に移るだろ！
倉科　（風子に）へへっ。それにしてもよ。すっかり社長夫人の貫禄だねぇ。

真一　それなら嬉しいが、自主独立の一点張りでさ…。
倉科　えっ。自主独立って別居か？
冴子　風ちゃんは、売れっ子のファッションデザイナー。春には都電通りの商店街に、ブティック『風子』をオープンするのよ。
倉科　へえー、自立した女か。今風で格好いいな…。
真一　俺は、会社を手伝って欲しいけだがね。
風子　会社の経営には何の興味ありません。
倉科　（真一を肘で突き）社長。どっかで聞いたセリフだな？
真一　やめろよ。気持ち悪い！
冴子　二人は相変わらず仲が良いわねぇ。
真一　止めてよー。冴子さーん。
冴子　それで、倉科君は何の仕事してるの？
倉科　昔馴染みのダチ公と、不動産関係の仕事すよ…。
冴子　不動産業って地上げとか、ヤクザ絡みの仕事じゃないの？
倉科　今やオリンピック景気で、東京の地べたは鰻登り。一掘りすりゃシジミ殻がザクザク出てくる、この一帯の腐れ地べたが坪何百万のお宝よ。多少、荒っぽくなるのは仕方ないすよ。
冴子　倉科君には、オリンピック様々ってわけね。
倉科　まあ。ウハウハとはいきませんがね。
白鳥　（通路から現れて）おおっ。現れたな。
倉科　（九〇度に腰を折り）その節はご迷惑おかけしました！
白鳥　もう、身体はすっかりいいのか？
倉科　片方の肺を取られましたが、結核菌とはおさらばしました。
白鳥　（椅子に座り）あまり無茶するなよ。
倉科　はーい。酒も煙草も節制してまーす。
朱実　こんにちはー。

玄関から和服姿の朱実が現れる。
朱実の後に蝶ネクタイの井上がいる。

井上　ボス。ご無沙汰しておりやす。
白鳥　あーあ、仁義はいいから座れや。
井上　へーい。どちらさんもごめんなすって！
白鳥　憧れのバーテンダー。慣れたかい？
井上　へい。少しは様になってめぇりやした。（と、シェーカーの手振りして）後でお披露目させて頂きやす。
白鳥　ほう。カクテルとは楽しみだな。
倉科　（朱実に）おう！
朱実　よう！
倉科　そんな格好で何やってんだ？
朱実　そっちこそ…。

と、倉科と朱実の感じが何とも微妙だ。

倉科　まったく、一度も見舞いもこねぇでよー。
朱実　なーに、寂しかったあ？
倉科　連絡ねぇって、母ちゃんが心配してたぞ。
風子　朱実ちゃんは、銀座のクラブ『紫苑』のママよ。
倉科　えーっ。クラブ『紫苑』のママー？
朱実　へへ、雇われママだけどね。

倉科　（井上に）で、何でお前さんが一緒なんだ？
朱実　あたしがスカウトしたのさ。
倉科　えーっ。ヤクザ者をか？
朱実　バーテンダー兼、用心棒兼、カ・レ・シ。
倉科　か、彼氏ー？
井上　へへっ、よろしく。お兄さん！
倉科　えっ。お兄さんて…おれーっ？
白鳥　ははは、似合いの義兄弟じゃないか！
倉科　工場長ー。やめてよー。

倉科の慌てぶりに全員が爆笑。

冴子　朱美ちゃんは、『紫苑』のママやりながら、書いた小説が認められて、新進女流作家としてデビューするのよ。
倉科　えーっ。朱実が女流作家だあ？
風子　その挿絵を描いたのが縁で、民夫が「日の出」出版社の制作に、就職が決まった分けなのよ。
倉科　へぇー。それでこの横断幕かー。
民夫　一にも二にも、朱実先生のお陰です。
朱実　そんなことないよ。編集長が「君の泥臭い小説にぴったりの挿絵だ」って太鼓判押したんだからー。
民夫　でも、朱美ちゃんの押しに負けたって…。
井上　例のごとくえらい剣幕で、啖呵きりやしたからねぇ。
朱実　じゃじゃじゃ～ん。その校正刷りのお披露目で～す。

と、風呂敷を解いてゲラ刷りを配る。

風子　うーん。インクの良い匂いー。
倉科　民夫、随分と腕上げたじゃねぇか？
民夫　倉科さんの叱咤激励のお陰ですよ。
倉科　おお、そうかそうか。俺がゴロゴロしてる間に、凄ゲー様変わりだな。（と、ゲラ刷り読む）「少女は兄に連れられて…」ん。朱実、これは何て読むんだ？
朱実　ぬ・か・る・み。
倉科　そうかそうか。「泥濘の細い坂道を登ると、都電の軌道が冷たく光る新宿通りにでた」何だこれは俺と朱実じゃねぇか？
朱実　鉄屑拾いの思い出…。
倉科　「赤線・青線地帯の裏道から、ゴールデン街を抜けて、歌舞伎町で残飯を漁り…」あの頃は学校もいかねぇで、空きっ腹抱えて一日中歩き回ったな…。
朱実　淀橋のヤッチャ場で野菜の切れっ端を、むしゃむしゃ食べてお腹を壊してね…。
真一　情景描写が実にリアルでいいねぇ。
白鳥　うむ。登場人物もよく特徴を捉えているな。
風子　特に工場長がゴキブリ食べた場面は最高ですね。
白鳥　ははは、（井上に）朱実とえらい啖呵を切ってたなあ。
井上　ボス。それは時効でやすよ…。
朱実　出版社でも評判が良くってね。「働く女性」誌に続編を連載することに決まったんだー。
倉科　朱実、兄ちゃんは嬉しい。こい！　（と、両手を広げる）

朱実　（逃げて）嫌だーっ！
倉科　何でだよー。だったら俺のモデル代を払えよー。

と、倉科がずっこけて全員が爆笑。

白鳥　風子のブティック店オープン。朱実の小説家デビュー。パン作りしながら絵を学んで、出版社に就職する民夫の根性は若い者の鑑だ。が、誰もパン職人にならんのは寂しい…。
冴子　はーい。では乾杯しましょう。
朱実　はいはーい。待ってましたあ。

と、朱実がゲラ刷りを片付ける。
風子がビールの栓を抜く。
冴子がみんなのコップに注いで回る。

冴子　風ちゃんはジュースかな？
風子　いーえ。ビールをください。
真一　おいおい、赤ちゃんが酔っぱらうぞ？
倉科　ははは、いいじゃねぇか。「オギャア」と生まれた途端に、誰かみてぇに「親父に向ってナンセンス」なんてよ。
真一　あ、この野郎。嫌みを言いやがって！
全員　あっははは。（と、笑う）
冴子　工場長。乾杯の音頭をお願いしまーす。
白鳥　うむ。では民夫の新しい門出を祝して…。
真一　叔父貴、俺たち俺たち…。
白鳥　うむ。二人目の安産を願って…。
朱実　工場長、あたしの作家デビュー。
白鳥　ん、朱実の小説家デビューを祝して…。
倉科　工場長。（自分を指さし）俺の全快祝い…。
白鳥　ああ、面倒だ。全部まとめてカンパーイ！

全員、グラス合せてを飲みほす。

倉科　くー、五臓六腑にしみるぜ。何たって娑婆これだねぇ。
白鳥　（三船敏郎を真似て）男は黙ってサッポロビール！
朱実　工場長。渋ーい！
冴子　民夫君が居なくなると労働組合が心配ね？
民夫　大丈夫。しっかり者の委員長を据えましたから。
真一　会社としては民夫が委員長だと、何かと遣り易いんだがな。ねぇ、工場長？
民夫　えーっ。それどういう意味すか？
倉科　そういう意味だろう？
民夫　あーっ、しどーい！

井上がラジオのボリュームを上げる。
大きな声でマラソンの実況が流れる。

ラジオの声　「…アベベの姿が見えてきました。三八キロをひた走り、まったく疲れた様子は見えません。いま甲州街道を右折して、新宿通り入ってきました。アベベの後方には二位の円

谷選手を捉えることは出来ません…」
倉科　おいっ。アベベ来ちゃうよ。アベベーっ！
朱実　（井上に）行くよーっ！
井上　へい。どちらさんも、ごめんなすって！

と、三人が玄関から飛び出して行く。

真一　おい、転ぶなよ。
風子　大丈夫よ。冴子さんは？
冴子　私は埃っぽいの苦手だからパス。
風子　（民夫に目配せし）肝心な時に腹病みしないでよ！
民夫　うーす。任せなさい！　（と、親指を立てる）

真一が風子をエスコートして玄関へ去る。

白鳥　さてと、老兵は去るとするか…。
冴子　工場長は円谷を応援しないんですか？
白鳥　軍人は嫌いだからな…。
冴子　工場長。軍人じゃなくて自衛官…。
白鳥　同じようなものさ…。（と、通路へ去る）
冴子　民夫君は行かないの？
民夫　ええ、ちょっと…。
冴子　どうしたの。顔色悪いわよ？
民夫　いや別に…何でもないですー。
冴子　倉科くんと朱実ちゃんが去って、民夫君も居なくなると、こも寂しくなるわねぇ。
民夫　はあ。俺も去り難いです…。
冴子　でも新しい世界に巣立つのを、見送る嫌いじゃないんだあ。私は看護婦を諦めて、ここに骨埋めるのかしらね…。
民夫　あのー、そのことですが。務め先が落ち着いたら、迎えにきますからーっ。
冴子　うん。身体に気を付けて、元気で頑張るのよ！
民夫　はいーっ？
冴子　民夫君は、人の意見に流されやすいから、自分の意見はビシッと態度で示さないと駄目よ！
民夫　はあ。ご指導あり難うございますー。
冴子　どうしたの？　アベベ行っちゃうわよ？
民夫　うー。痛たたーっ！　（と、下っ腹を抑えて玄関へ去る）
冴子　（民夫を見送り）あーっ。嫌んなるほどいい天気ーっ！

と、大きく伸びをしてテーブルに戻る。
「ほーっ」と溜め息を吐いて頬づえをつく。

冴子　あれっ。「迎えにきますからー」って？　えっ、えーっ。そう言うことーっ。た、民夫くーん！

冴子、「アベベ、アベベーッ」の大歓声に身を委ねる。

幕